

**小布施町**  
**総合計画・総合戦略策定に関する**  
**人口動向分析**

## 目 次

1. 人口動向分析.....	3
1-1. 人口ビジョンと国勢調査の結果について時系列による人口動向分析.....	3
(1) 人口ビジョンと国勢調査結果の比較.....	3
(2) 目標値に対する国勢調査結果の比較.....	4
1-2. 時系列による人口動向分析.....	9
(1) 総人口の推移と年齢3区分別人口の推移.....	9
(2) 年齢3区分別人口の推移.....	10
(3) 出生・死亡、転入・転出の推移.....	11
(4) 地区別総人口の推移.....	12
(5) 総人口に与えてきた自然増減と社会増減の影響.....	14
(6) 年齢階級別の社会増減の状況.....	15
(7) 転入・転出の状況.....	16
(8) 性別・5歳階級別転入・転出の状況.....	17
(9) 地域別純移動の状況.....	20
1-2. 年齢階級別の人口変化分析.....	21
(1) 性別・年齢階級別の人口変化の状況.....	21
(2) 性別・年齢階級別の人口変化の長期的動向.....	22
1-3. 出生に関する分析.....	23
1-4. 雇用や就労等に関する分析.....	24
(1) 産業別就業者の状況.....	24
(2) 男女別産業人口の状況.....	25
(3) 年齢階級別産業人口の状況.....	26
2. 将来人口推計.....	27
2-1. 将来人口推計.....	27
(1) パターン1（社人研推計準拠）の総人口.....	27
(2) 人口減少段階の分析.....	28
2-2. 将来人口に及ぼす自然増減・社会増減の影響度の分析.....	30
(1) 自然増減・社会増減の影響度の分析.....	30
(2) 人口の年齢構成の分析.....	32
(3) 老年人口比率の変化.....	33
2-3. 人口の変化が地域の将来に与える影響の分析.....	34
(1) 人口減少による影響.....	34
(2) 高齢化の影響.....	37
3. 人口の将来展望.....	39
3-1. 人口の推計パターン.....	39

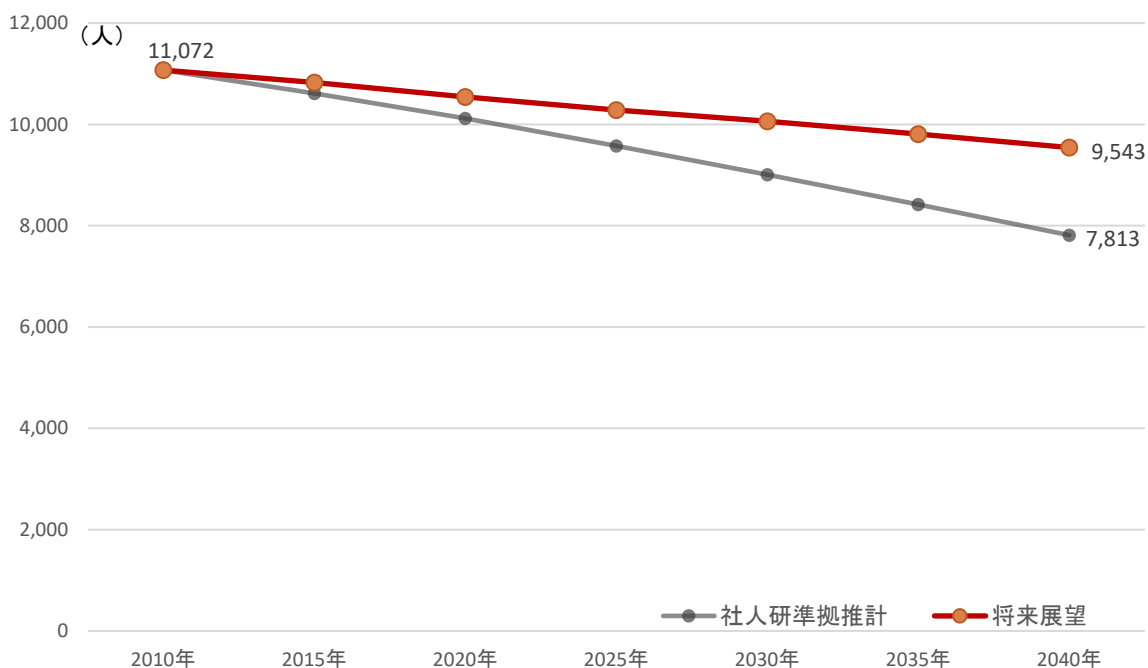
# 1. 人口動向分析

## 1-1. 人口ビジョンと国勢調査の結果について時系列による人口動向分析

### (1) 人口ビジョンと国勢調査結果の比較

現行ビジョンでは、2040年（令和22年）に人口9,543人を確保することをめざしています。現人口ビジョンにおける2015年推計値と国勢調査結果（2015年）を比較すると、総人口が推計値に対して124人下回っています。生産年齢人口（15～64歳）で186人下回っていますが、年少人口（0～14歳）で67人上回り、老年人口（65歳以上）で12人下回っています。

図表1 人口ビジョンにおける推計値



※出典：小布施町人口ビジョン（平成27年10月）

図表2 小布施町の将来人口推計目標値と国勢調査結果比較

	現人口ビジョン 推計値(2015年)(A)	国勢調査結果 (2015年)(B)	目標値に対する 国勢調査比較(B-A)
総人口(人)	10,826 <sup>※1</sup>	10,702人	▲124
年少人口(0～14歳)(人)	1,354	1,421	67
生産年齢人口(15～64歳) (人)	5,951	5,766	▲185
老年人口(65歳以上)(人)	3,522	3,515	▲7

※出典：小布施町人口ビジョン（平成27年10月）、国勢調査（平成27年）

※1：小数点以下の端数処理の関係上、合計が一致しない

## (2) 目標値に対する国勢調査結果の比較

- ・国勢調査結果と目標値を比較すると、全体で1.1%、124人少なく、15～19歳、20～24歳の年代で目標値を約2割～4割程度少なく、目標値を100人以上下回っています。一方、0～14歳では、目標値を5.0%、67人上回っています。25～29歳、35～39歳では、目標値を10%程度上回っています。

### ※参考

- ・2015年国勢調査実績値は、10～19歳は、1,013人、25～39歳は、1,517人。
- ・2010年国勢調査の15～24歳は785人で2015年国勢調査の20～29歳は336人で▲449人
- ・2010年国勢調査の25～39歳は1,878人で2015年国勢調査の25～39歳は1,517人で▲361人

図表3 小布施町の将来人口推計目標値と国勢調査結果比較

	2015年 目標値 (A)	2015年 国勢調査結果 (B)	B-A	B/A
0～4歳	384	384	0	100.0%
5～9歳	455	492	37	108.2%
10～14歳	515	545	30	105.9%
15～19歳	571	468	-103	82.0%
20～24歳	457	292	-165	63.9%
25～29歳	326	360	34	110.4%
30～34歳	516	474	-42	91.9%
35～39歳	620	683	63	110.2%
40～44歳	755	767	12	101.5%
45～49歳	674	679	5	100.8%
50～54歳	635	620	-15	97.7%
55～59歳	625	634	9	101.5%
60～64歳	772	789	17	102.2%
65～69歳	1,018	1,041	23	102.2%
70～74歳	771	769	-2	99.7%
75～79歳	612	639	27	104.4%
80～84歳	506	495	-11	97.8%
85～89歳	380	345	-35	90.7%
90歳～	235	226	-9	96.3%
(再掲) 0～14歳	1,354	1,421	67	105.0%
(再掲) 15～64歳	5,951	5,766	-185	96.9%
(再掲) 65歳以上	3,522	3,515	-7	99.8%
(再掲) 75歳以上	1,733	1,705	-28	98.4%
合計	10,826	10,702	-124	98.9%

【参考】社人研推計に対する国勢調査結果の比較

- ・社人研推計値と国勢調査結果を比較すると、全体で0.8%、82人多く、15～19歳、20～24歳、25～29歳、30～34歳の年代で社人研推計より少なくなっています。一方、5～9歳、10～14歳では、推計値を10%程度上回っています。また、35～29歳でも目標値を10%程度上回っています。

図表 2013年の社人研推計値と国勢調査結果比較

	2013年 社人研推計 (A)	2015年 国勢調査結果 (B)	B-A	B/A
0～4歳	392	384	-8	98.0%
5～9歳	448	492	44	109.8%
10～14歳	495	545	50	110.1%
15～19歳	486	468	-18	96.3%
20～24歳	331	292	-39	88.2%
25～29歳	382	360	-22	94.2%
30～34歳	494	474	-20	96.0%
35～39歳	618	683	65	110.5%
40～44歳	734	767	33	104.5%
45～49歳	660	679	19	102.9%
50～54歳	636	620	-16	97.5%
55～59歳	630	634	4	100.6%
60～64歳	776	789	12	101.5%
65～69歳	1019	1,041	19	101.9%
70～74歳	772	769	-4	99.5%
75～79歳	599	639	39	106.5%
80～84歳	506	495	-11	97.8%
85～89歳	382	345	-37	90.3%
90歳～	260	226	-34	86.9%
(再掲) 0～14歳	1,335	1,421	86	106.4%
(再掲) 15～64歳	5,747	5,766	18	100.3%
(再掲) 65歳以上	3,538	3,515	-28	99.2%
合計	10,620	10,702	82	100.8%

【参考】 住民基本台帳の転入・転出の推移

・0～9歳人口は、2005年以降社会増となっています。15～24歳人口は2000年以降、転出超過となっており、2018年は過去最高となりました。2018年は全世代のうち、35～39歳の転入が最も多くなっています。

図表 住民基本台帳の転入・転出の推移

	2000年			2005年			2010年			2012年			2013年			2014年			2015年			2016年			2017年			2018年												
	転入	転出	合計	転入	転出	合計	転入	転出	合計	転入	転出	合計	転入		転出		合計	転入		転出		合計	転入		転出		合計													
													男	女	男	女		男	女	男	女		男	女	男	女		男	女											
0～4歳	28	37	▲9	34	22	12	41	29	12	32	16	16	33	19	14	8	11	9	8	2	16	23	6	6	27	15	10	7	9	9	20	21	8	9	24	26	17	11	8	24
5～9歳	11	12	▲1	22	13	9	17	7	10	16	3	13	22	8	14	7	9	5	5	6	7	5	3	1	8	7	9	2	2	12	10	9	2	4	13	13	7	0	4	16
10～14歳	12	5	7	9	7	2	5	9	▲4	7	4	3	7	0	7	4	2	1	1	4	5	4	3	5	1	2	1	1	3	▲1	3	0	6	4	▲7	7	5	1	3	8
15～19歳	10	40	▲30	12	33	▲21	10	28	▲18	13	30	▲17	13	21	▲8	8	4	15	13	▲16	3	7	13	11	▲14	2	7	16	12	▲19	3	2	14	8	▲17	4	4	24	14	▲30
20～24歳	58	71	▲13	46	65	▲19	26	56	▲30	33	46	▲13	21	55	▲34	23	14	16	24	▲3	13	14	30	36	▲39	9	10	33	27	▲41	13	25	23	42	▲27	11	13	27	33	▲36
25～29歳	76	97	▲21	66	77	▲11	69	65	4	36	55	▲19	50	45	5	20	24	18	30	▲4	15	23	27	24	▲13	16	31	21	29	▲3	21	33	16	20	18	14	18	19	34	▲21
30～34歳	52	49	3	62	43	19	62	38	24	31	40	▲9	50	42	8	13	24	24	23	▲10	25	27	11	14	27	26	19	18	19	8	27	29	17	22	17	24	28	19	20	13
35～39歳	26	25	1	26	28	▲2	42	28	14	25	28	▲3	40	22	18	19	29	17	20	11	19	21	15	21	4	10	16	11	16	▲1	20	22	16	12	14	20	27	10	8	29
40～44歳	19	13	6	20	11	9	19	9	10	23	13	10	10	10	0	10	9	9	13	▲3	11	16	12	11	4	11	16	11	8	8	12	6	5	13	0	12	13	5	9	11
45～49歳	14	6	8	10	6	4	9	9	0	13	15	▲2	10	4	6	9	6	8	5	2	10	3	3	7	3	7	2	7	7	▲5	4	7	6	11	▲6	6	5	4	5	2
50～54歳	15	6	9	10	7	3	7	2	5	7	6	1	8	3	5	2	3	4	5	▲4	1	1	2	1	▲1	7	3	4	2	4	5	6	6	4	1	3	4	6	9	▲8
55～59歳	15	3	12	9	6	3	4	5	▲1	8	7	1	5	3	2	3	3	7	6	▲7	3	3	1	4	1	1	4	1	2	2	2	7	5	3	1	6	6	2	3	7
60～64歳	4	6	▲2	3	2	1	9	8	1	11	6	5	9	7	2	3	5	3	3	2	2	3	1	1	3	4	5	3	2	4	3	1	4	5	▲5	1	1	1	0	1
65～69歳	2	2	0	4	5	▲1	3	5	▲2	6	3	3	5	2	3	3	4	1	3	3	3	1	3	3	▲2	2	4	3	2	1	5	1	4	3	▲1	4	3	5	3	▲1
70～74歳	4	4	0	1	5	▲4	1	1	0	4	3	1	3	1	2	1	1	2	1	▲1	1	1	1	3	▲2	0	2	2	3	▲3	1	2	0	3	0	0	1	3	1	▲3
75～79歳	4	2	2	3	1	2	5	0	5	1	2	▲1	2	3	▲1	2	2	1	1	2	1	0	1	0	0	4	3	2	0	5	2	1	2	0	1	3	2	0	1	4
80～84歳	6	5	1	7	2	5	5	2	3	4	6	▲2	6	5	1	1	4	0	1	4	1	2	0	4	▲1	1	0	0	2	▲1	1	4	2	6	▲3	5	6	5	2	4
85～89歳	2	2	0	3	1	2	8	1	7	9	2	7	7	8	▲1	2	3	1	1	3	1	4	3	3	▲1	3	5	0	2	6	0	3	1	0	2	1	4	1	1	3
90歳以上	4	2	2	4	4	0	7	4	3	5	4	1	5	4	1	0	2	0	3	▲1	2	5	0	6	1	2	3	1	1	3	1	5	0	4	2	2	7	0	3	6
合計	362	387	▲25	351	338	13	349	306	43	284	289	▲5	306	262	44	138	159	141	166	▲10	139	163	135	161	6	129	150	143	148	▲12	153	184	137	173	27	162	171	143	161	29
0～14歳	51	54	▲3	65	42	23	63	45	18	55	23	32	62	27	35	19	22	15	14	12	28	32	12	12	36	24	20	10	14	20	33	30	16	17	30	46	29	12	15	48
15～64歳	289	316	▲27	264	278	▲14	257	248	9	200	246	▲46	216	212	4	110	121	121	142	▲32	102	118	115	130	▲25	93	113	125	124	▲43	110	138	112	140	▲4	101	119	117	135	▲32
65歳以上	22	17	5	22	18	4	29	13	16	29	20	9	28	23	5	9	16	5	10	10	9	13	8	19	▲5	12	17	8	10	11	10	16	9	16	1	15	23	14	11	13
20～29歳女性																91		97	▲6		85		95	▲10		76		91	▲15		109		96	13		86		95	▲9	

【参考】 独自推計と国勢調査結果の誤差率

・独自推計の2015年と2015年の国勢調査の誤差率は以下のとおり。

2015年	2015実績値			独自推計			2015実績－独自推計			推計誤差率		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
0～4歳	193	191	384	197	187	384	-4	4	0	△2.1%	2.2%	0.0%
5～9歳	248	244	492	222	233	455	26	11	37	11.8%	4.8%	8.2%
10～14歳	302	243	545	278	237	515	24	6	30	8.7%	2.6%	5.9%
15～19歳	238	230	468	297	274	571	-59	-44	-103	△19.8%	△16.0%	△18.0%
20～24歳	135	157	292	196	262	457	-61	-105	-165	△30.9%	△40.0%	△36.1%
25～29歳	181	179	360	146	181	326	35	-2	34	24.4%	△1.0%	10.4%
30～34歳	235	239	474	254	262	516	-19	-23	-42	△7.5%	△8.6%	△8.1%
35～39歳	336	347	683	328	292	620	8	55	63	2.6%	18.7%	10.2%
40～44歳	389	378	767	389	367	755	0	11	12	0.1%	3.0%	1.5%
45～49歳	330	349	679	323	350	674	7	-1	5	2.1%	△0.4%	0.8%
50～54歳	290	330	620	294	341	635	-4	-11	-15	△1.4%	△3.1%	△2.3%
55～59歳	305	329	634	297	328	625	8	1	9	2.7%	0.4%	1.5%
60～64歳	369	420	789	356	416	772	13	4	17	3.6%	1.0%	2.2%
65～69歳	506	535	1,041	496	522	1,018	10	13	23	2.0%	2.5%	2.2%
70～74歳	395	374	769	390	381	771	5	-7	-2	1.2%	△1.8%	△0.3%
75～79歳	289	350	639	275	337	612	14	13	27	5.1%	3.9%	4.4%
80～84歳	214	281	495	219	287	506	-5	-6	-11	△2.3%	△2.2%	△2.2%
85～89歳	139	206	345	154	226	380	-15	-20	-35	△9.8%	△9.0%	△9.3%
90歳～	42	184	226	54	180	235	-12	4	-9	△22.7%	2.1%	△3.7%
0～14歳	743	678	1,421	697	657	1,354	46	21	67	6.6%	3.2%	5.0%
15～64歳	2,808	2,958	5,766	2,879	3,072	5,951	-71	-114	-185	△2.5%	△3.7%	△3.1%
65歳以上	1,585	1,930	3,515	1,589	1,934	3,522	-4	-4	-7	△0.2%	△0.2%	△0.2%
合計	5,136	5,566	10,702	5,164	5,662	10,826	-28	-96	-124	△0.5%	△1.7%	△1.1%

【参考】2015年実績値と2013年社人研推計の誤差率

2015年	2015実績値			2013推計			2015実績-2013推計			推計誤差率		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
0～4歳	193	191	384	201	191	392	-8	0	-8	△4.1%	0.0%	△2.1%
5～9歳	248	244	492	228	220	448	20	24	44	8.6%	10.9%	9.7%
10～14歳	302	243	545	269	226	495	33	17	50	12.3%	7.7%	10.2%
15～19歳	238	230	468	239	247	486	-1	-17	-18	△0.3%	△7.0%	△3.7%
20～24歳	135	157	292	137	194	330	-2	-37	-38	△1.3%	△18.9%	△11.6%
25～29歳	181	179	360	182	200	382	-1	-21	-22	△0.6%	△10.5%	△5.8%
30～34歳	235	239	474	254	240	493	-19	-1	-19	△7.4%	△0.3%	△3.9%
35～39歳	336	347	683	332	285	618	4	62	65	1.1%	21.7%	10.6%
40～44歳	389	378	767	377	356	733	12	22	34	3.1%	6.3%	4.6%
45～49歳	330	349	679	317	343	660	13	6	19	4.2%	1.7%	2.9%
50～54歳	290	330	620	296	339	635	-6	-9	-15	△2.1%	△2.6%	△2.4%
55～59歳	305	329	634	298	332	630	7	-3	4	2.3%	△0.8%	0.7%
60～64歳	369	420	789	355	421	776	14	-1	13	4.1%	△0.3%	1.7%
65～69歳	506	535	1,041	496	523	1,019	10	12	22	2.1%	2.3%	2.2%
70～74歳	395	374	769	392	380	772	3	-6	-3	0.8%	△1.6%	△0.3%
75～79歳	289	350	639	269	330	599	20	20	40	7.5%	6.0%	6.6%
80～84歳	214	281	495	220	286	506	-6	-5	-11	△2.7%	△1.8%	△2.2%
85～89歳	139	206	345	156	226	381	-17	-20	-36	△10.6%	△8.8%	△9.5%
90歳～	42	184	226	61	198	260	-19	-14	-34	△31.2%	△7.3%	△12.9%
0～14歳	743	678	1,421	699	637	1,335	44	41	86	6.4%	6.5%	6.4%
15～64歳	2,808	2,958	5,766	2,787	2,956	5,743	21	2	23	0.8%	0.1%	0.4%
65歳以上	1,585	1,930	3,515	1,593	1,944	3,537	-8	-14	-22	△0.5%	△0.7%	△0.6%
合計	5,136	5,566	10,702	5,078	5,537	10,615	58	29	87	1.1%	0.5%	0.8%

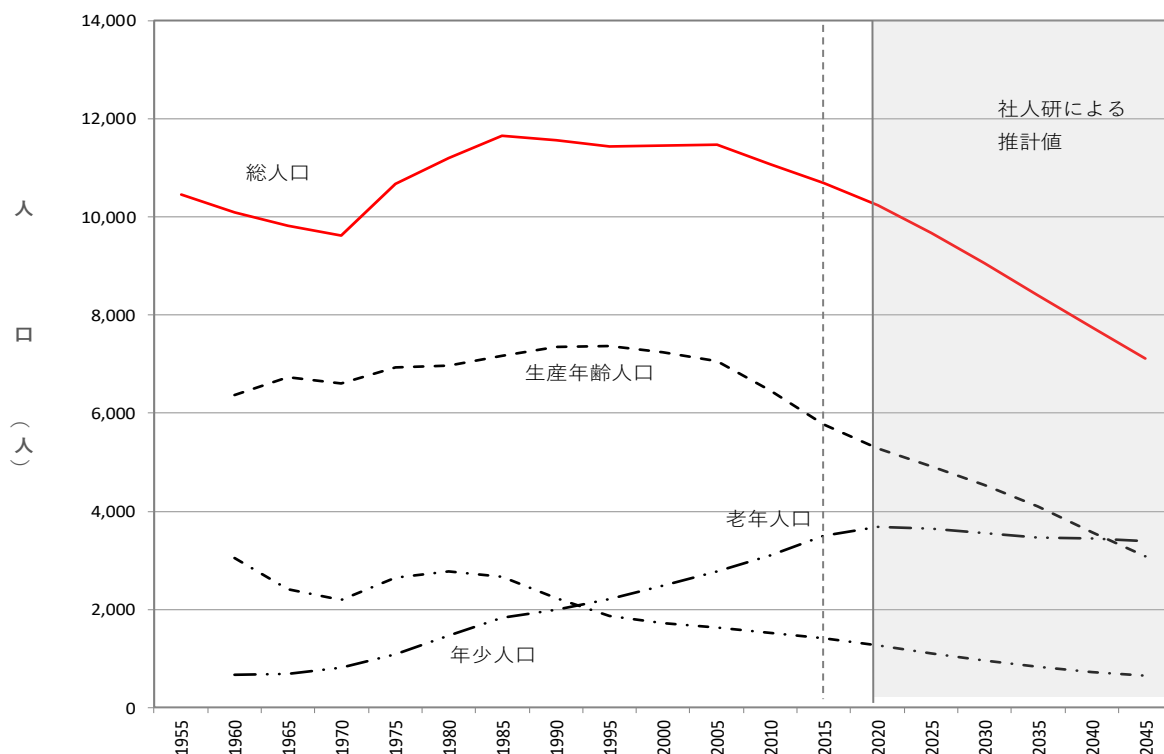


## 1-2. 時系列による人口動向分析

### (1) 総人口の推移と年齢3区分別人口の推移

- ・小布施町の人口は、高度成長期の1955～1970年に急激な減少期となりました。1970年代には「団塊ジュニア世代」の誕生及び公営住宅の建設や宅地造成・分譲により、増加傾向が進みました。その後、1985年の11,663人をピークに、ほぼ横ばいの人口を維持していましたが、2005年以降は年0.4%前後の減少が続き、2015年の人口は10,702人です。
- ・国立社会保障人口問題研究所（以降、社人研）の推計によると、2015年以降は年0.8%前後の減少が継続し、2045年には7,813人（2015年の約7割）になると推計されています。
- ・老年人口は、1995年には年少人口を上回り、その後2015年まで上昇を続けています。2020年以降は横ばいとなりますが、2045年には生産年齢人口を上回ると推測されます。
- ・年齢3区分別人口の構成の推移をみると、1960年においては年少人口30.3%、生産年齢人口63.1%、老年人口6.6%でしたが、2015年までには年少人口13.3%、生産年齢人口53.9%と減少傾向、一方、老年人口は32.8%と、増加傾向にあります。
- ・2045年の構成は、年少人口9.1%、生産年齢人口43.3%、老年人口47.6%となり、さらなる人口構成の変化が予想されます。

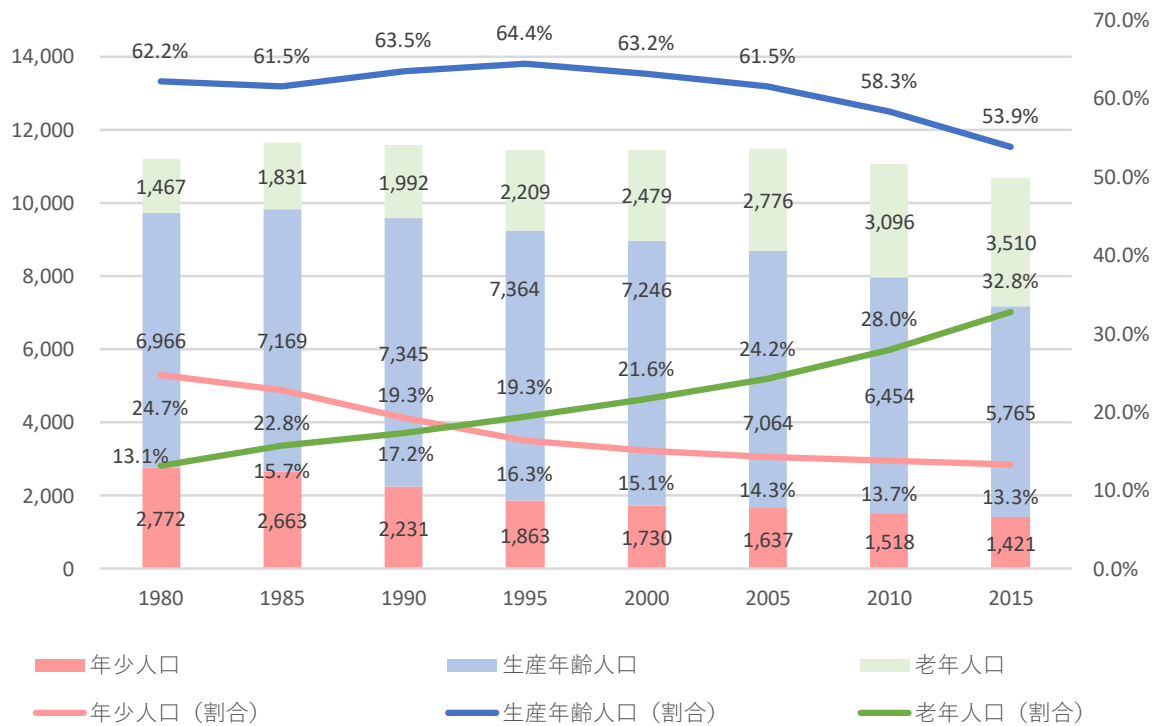
図表4 年齢3区分別人口の推移



## (2) 年齢3区分別人口の推移

年少人口、生産年齢人口は減少を続けていますが、老年人口は増加を続けています。2015年における年齢3区分の割合を2010年と比較すると、生産年齢人口は5.6%の減少ですが、年少人口は0.4%の減少にとどまっています。老年人口の割合は、4.8%の増加となっています。

図表5 年齢3区分別人口の推移



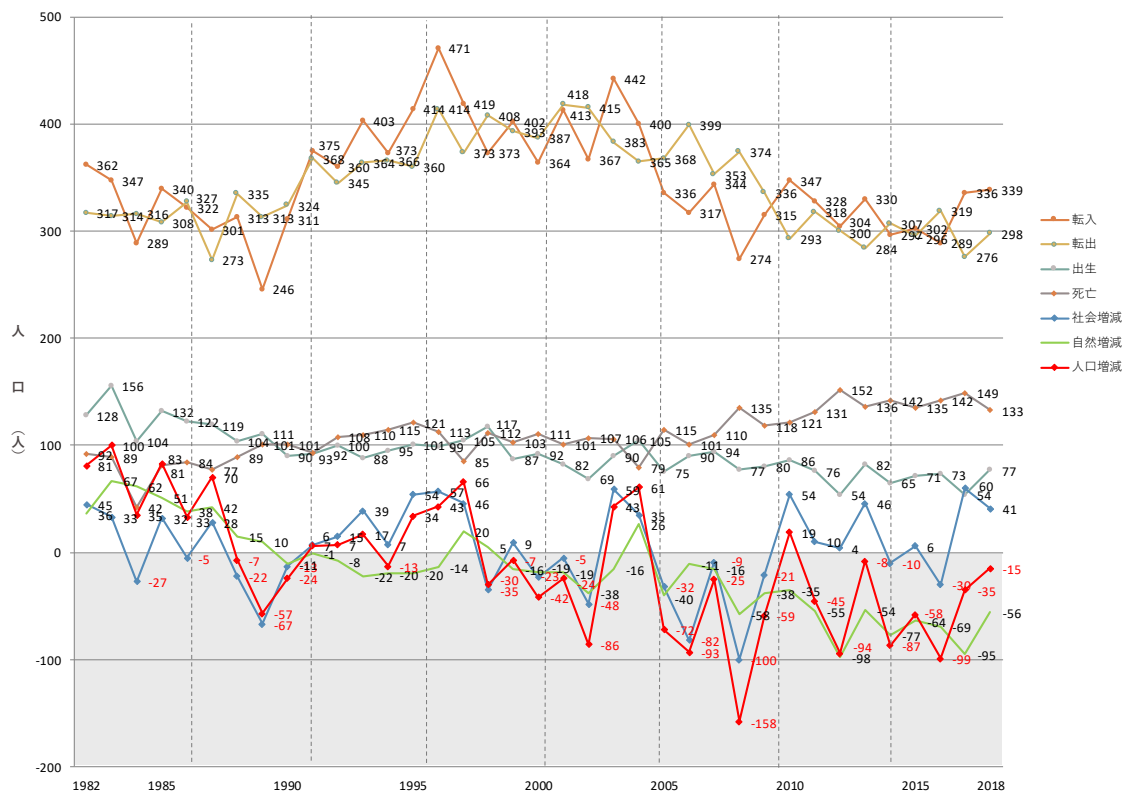
※出典：国勢調査

### (3) 出生・死亡、転入・転出の推移

- ・自然増減（出生数－死亡数）については、1990年以降、出生数が減り続けています。一方、死亡数は増加傾向にあり、1990年前後から死亡数が出生数を上回る、自然減の時代に入っています。
- ・2018年では出生数77人に対し死亡数は133人で、自然増減は－56人です。
- ・社会増減（転入数－転出数）は、1990年から2000年までは転入数が上回り、その後、増減を繰り返しましたが、2010年以降は転入数が転出数を上回っています。最も減少の大きかった2008年は転入数274人に対し転出数374人で、社会増減－100人でした。2017年、2018年においては、転出超過となっており、2017年は60人、2018年41人です。

図表6 出生・死亡、転入・転出の推移

(人)

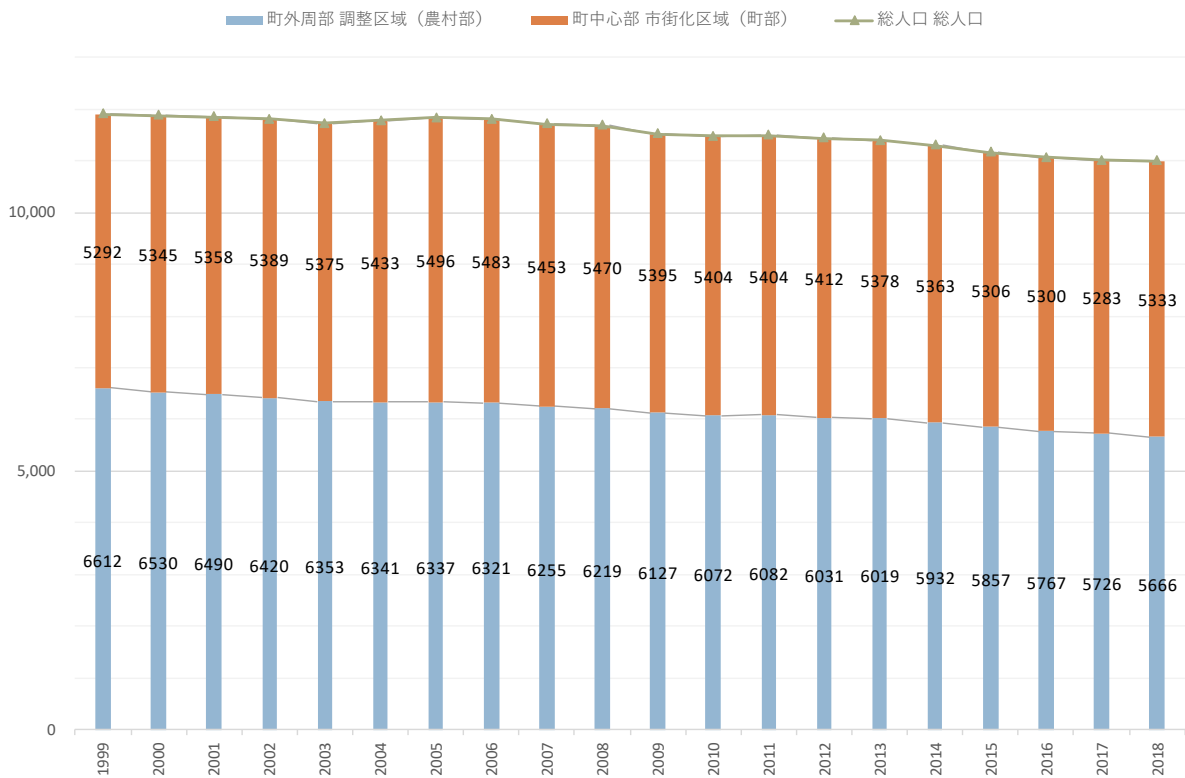


注) 1982年～1984年までの人口は国勢調査、1985年～2018年(1985年、1990年、1995年、2000年、2015年の総人口は国勢調査)は住民基本台帳より作成。人口動態は各年の1月1日～12月31日の値。

#### (4) 地区別総人口の推移

- 町外周部と町中心部それぞれの人口推移をみると、町外周部は2004年から2018年にかけて、平均0.8%ずつ減少しています。町中心部は、数値は微動するものの、2004年から2014年の年平均減少率は0.05%であり、人口が微減しています。

図表7 地区別人口の推移



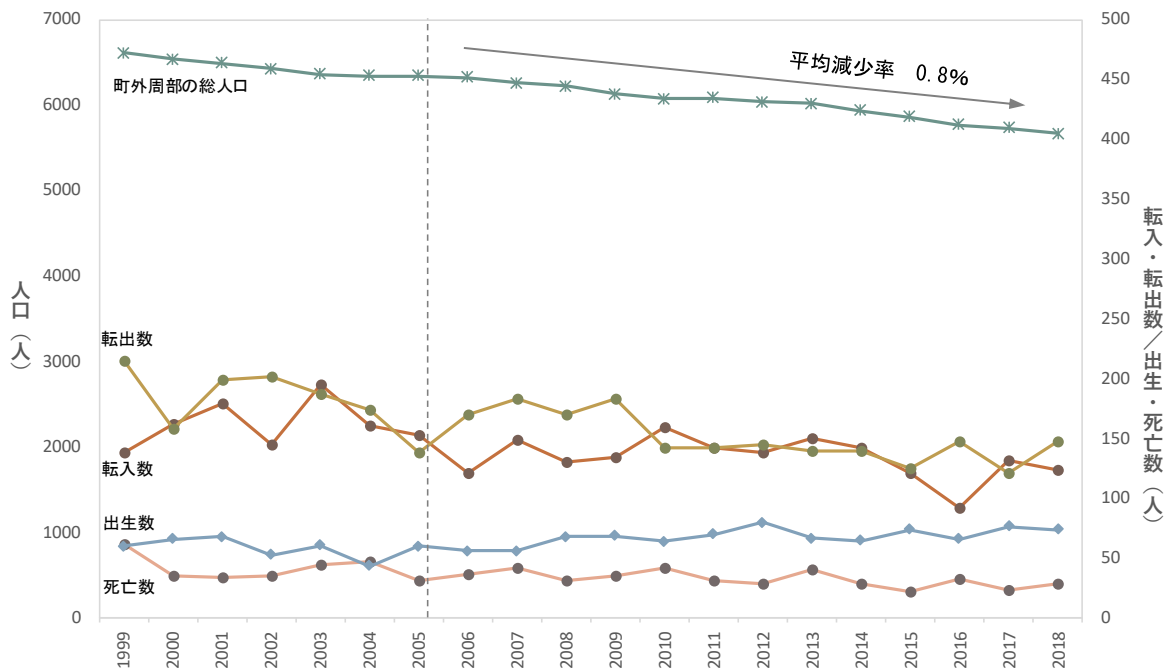
注) 住民基本台帳より作成。人口動態は各年の1月1日~12月31日の値

町外周部：市街化調整区域が占める割合が多い自治会（大島、飯田、林、山王島、北岡、押羽、羽場、六川、中子塚、矢島、清水、中条、松村、雁田、水上）

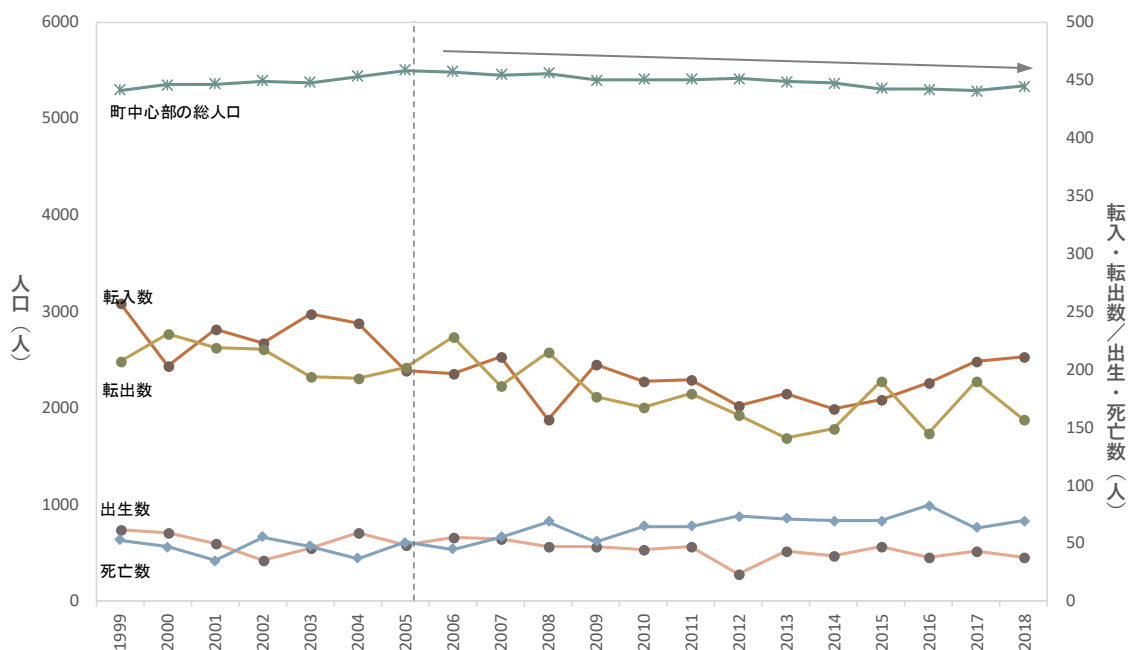
町中心部：市街化区域の占める割合が多い自治会（東町、上町、中町、伊勢町、中央、中扇、横町、福原、栗ガ丘、松の実、千両、松川、クリトピア）

- ・転入・転出数に関しては、町外周部では、数値が上下するものの2009年までは大幅な転出超過がみられましたが、2010年以降の年平均の転入転出数は-6人となっています。町中心部では、年平均転入数が202人、年平均転出数が187人であり、平均して転入超過傾向にあります。どちらの区域も転入数は2003年がピークでした。
- ・出生・死亡数に関しては、町外周部では年平均出生数35人、年平均死亡数64人、町中心部では、年平均出生数が46人、年平均死亡数が58人であり、どちらも死亡数が出生数を上回っています。

図表8 町外周部人口の推移



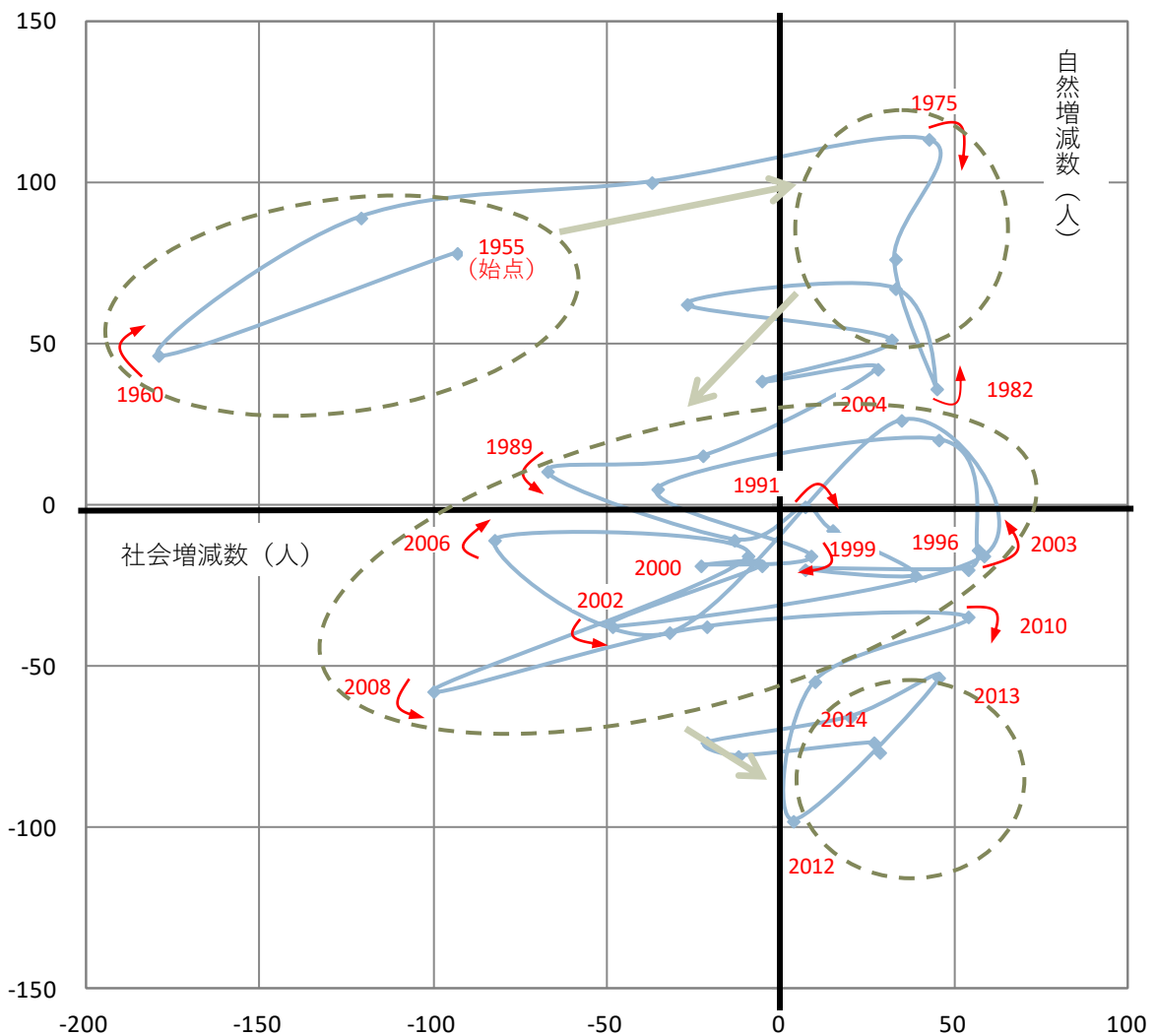
図表9 町中心部人口の推移



(5) 総人口に与えてきた自然増減と社会増減の影響

- ・1960年から1975年にかけては、高度経済成長期にあつて、自然増・社会減の傾向にあり、その後、1975年から1980年代の人口増加期には、おおむね自然増が社会増減を上回っていました。
- ・1990年代からは自然減の時代に入り、2000年代からは、社会減とあわさって、人口減少局面に入りましたが、2010年以降は再び社会増の傾向がみられることが小布施町の特徴といえます。

図表 10 総人口に与えてきた自然増減と社会増減の影響

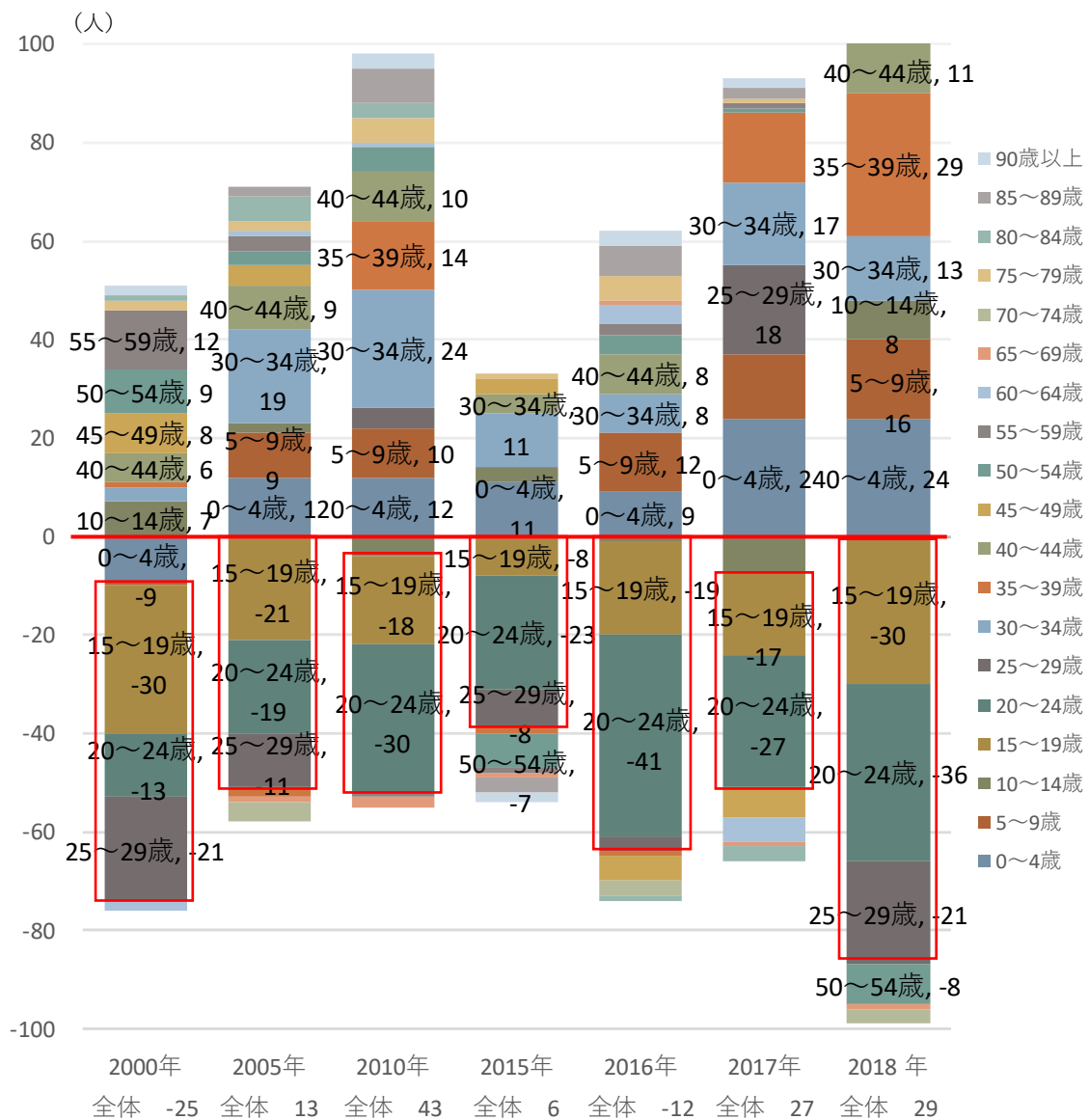


注) 人口動態は各年の1月1日～12月31日の値

(6) 年齢階級別の社会増減の状況

- ・転出数が多い年齢層は、15～19歳、20～24歳、25～29歳の生産年齢人口であり、15～19歳、20歳～24歳に関しては、全体の転入数が転出数を上回る2005年、2010年、2015年、2017年、2018年においても転出超過傾向にあります（-40、-48、-31人、-44人、-66人）。
- ・一方、転入数の多い年齢層は、30～44歳、0～9歳です。2018年は0～9歳の転入が40人であり、過去最高でした。

図表 11 年齢階級別の社会増減の状況

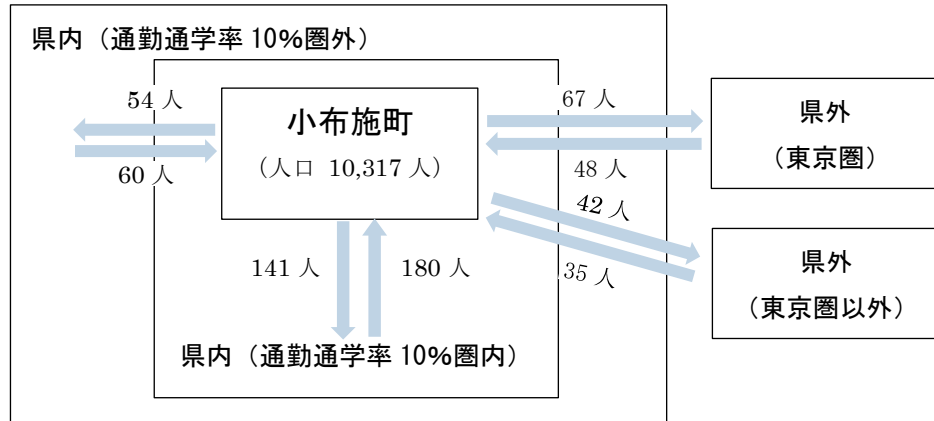


注) 住民基本台帳より作成

(7) 転入・転出の状況

- ・小布施町における 2018 年の転入数は 323 人、転出数は 304 人であり、純移動数（転入数－転出数）は+39 人と、転入超過になっています。
- ・転入は県内（通勤通学率 10%圏内）の移動が最も多く、次いで県内（通勤通学率 10%圏外）、転出は、県外（東京圏）、県外（東京圏外）の順です。

図表 12 小布施町の転入・転出の状況（2018 年）



図表 13 小布施町の転入・転出と純移動数（2018 年）

	転入数	転出数	純移動数	純移動の割合
県内 (通勤通学率 10%圏内)	180	141	39	205.3%
県内 (通勤通学率 10%圏外)	60	54	6	31.6%
県外(東京圏)	48	67	-19	-100.0%
県外(東京圏以外)	35	42	-7	-36.8%
合計	323	304	19	100.0%

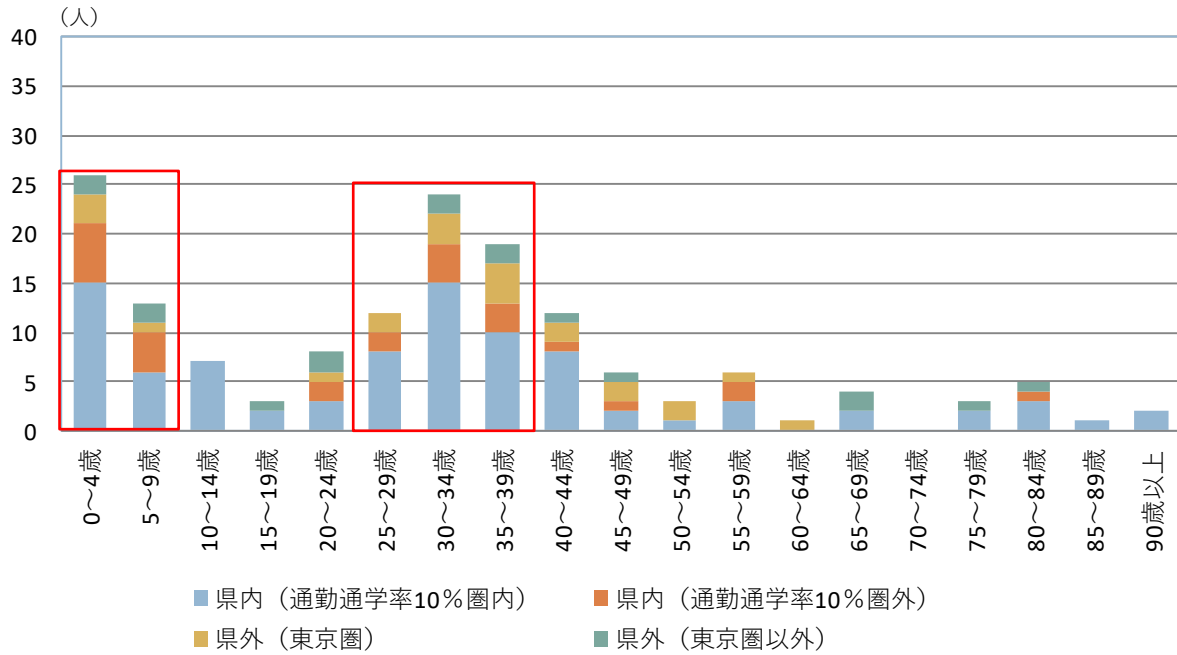
注) 通勤通学率 10%圏内は長野市、須坂市、中野市  
東京圏は、東京都、千葉県、埼玉県、神奈川県



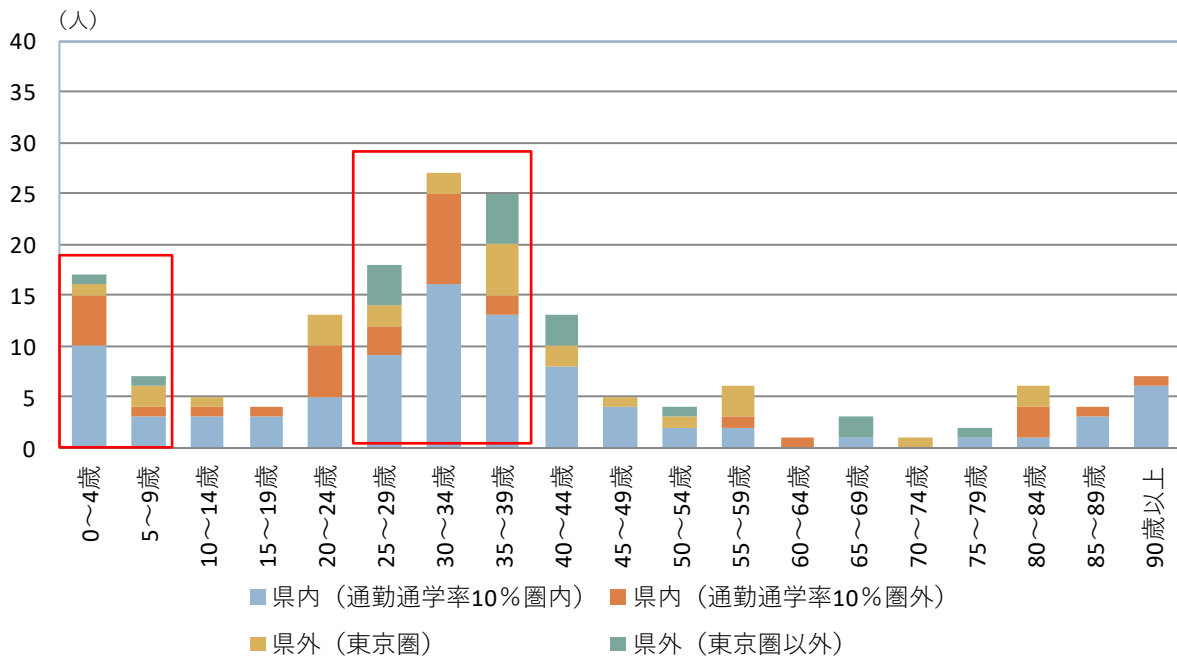
(8) 性別・5歳階級別転入・転出の状況

- ・転入の多い階級は、男女とも0～9歳、25～39歳です。特に女性に関して、30～34歳の転入数が多く、25～39歳のどの階級においても、県内（通勤通学率10%圏内）からの転入が多いです。

図表 14 5歳階級別転入数の状況（男性，2018年）

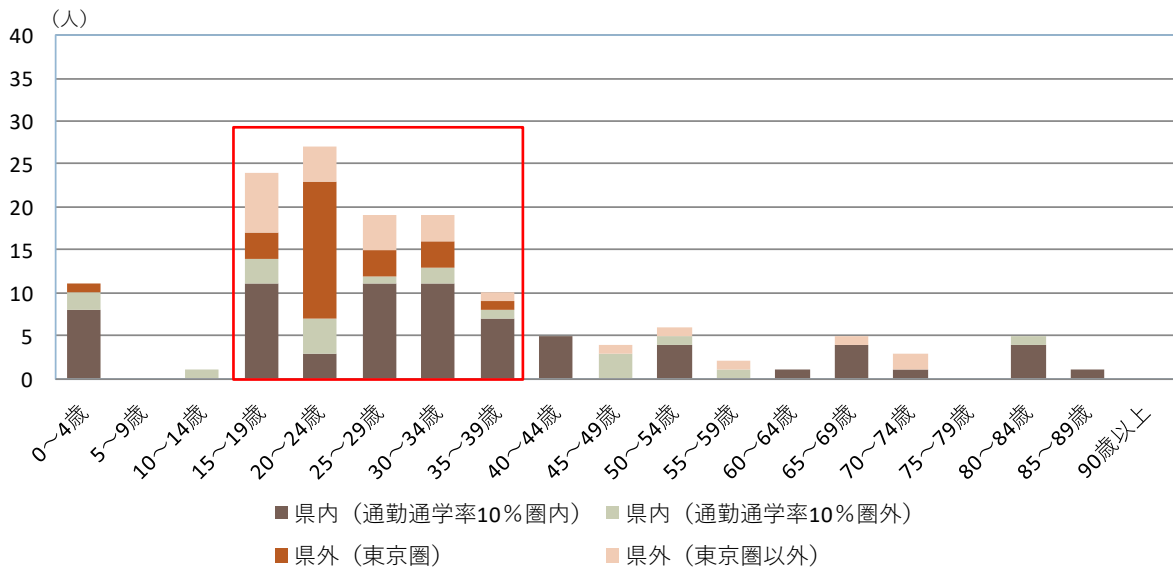


図表 15 5歳階級別転入数の状況（女性，2018年）

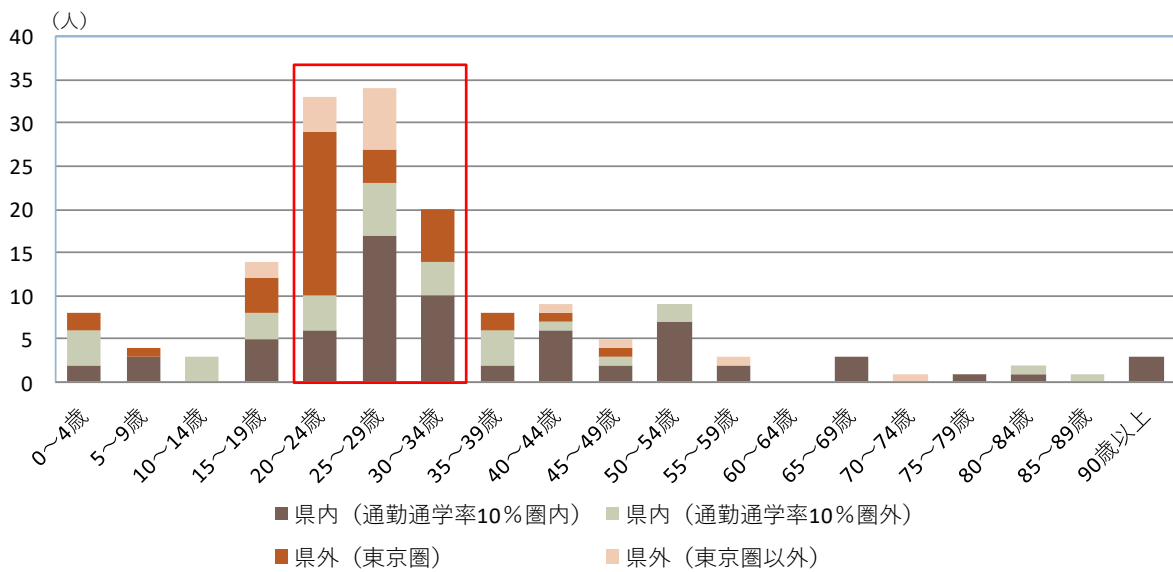


- ・転出は、男女とも 20～24 歳の県外（東京圏）への転出が多いです。男性は 15～34 歳まで転出が多いですが、なかでも 15～24 歳の転出が突出して多いです。また、25 歳～39 歳までの男性の圏内（通勤通学率 10% 圏内）への転出が多いです。女性は 25～34 歳までの県内への転出が多いです。

図表 16 5 歳階級別転出数の状況（男性，2018 年）

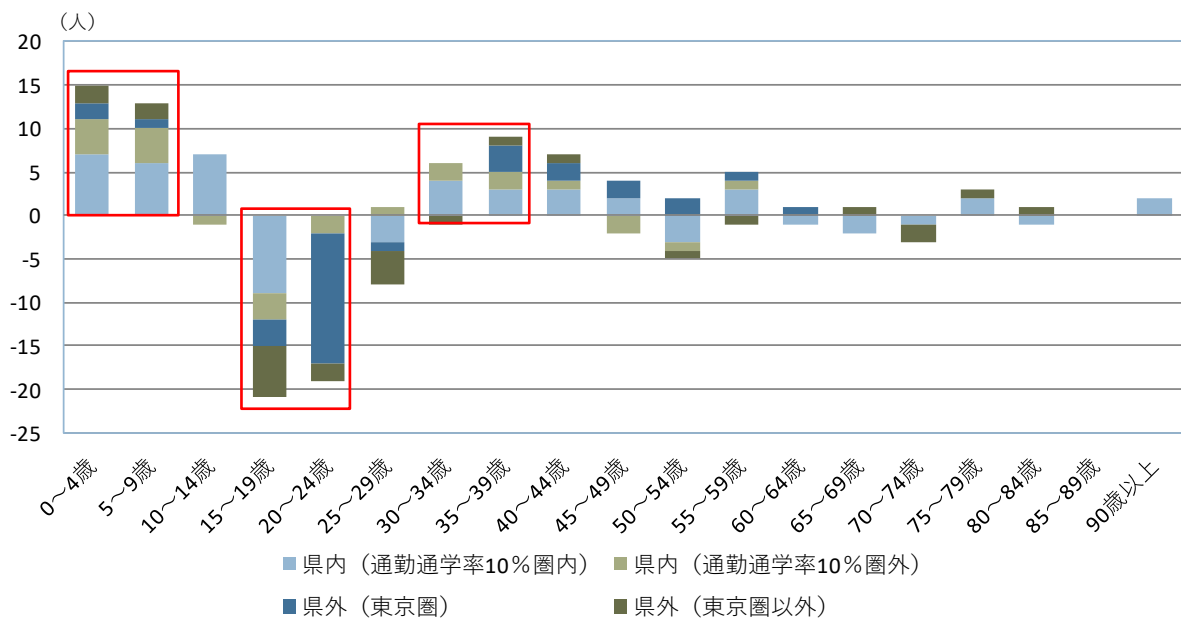


図表 17 5 歳階級別転出数の状況（女性，2018 年）

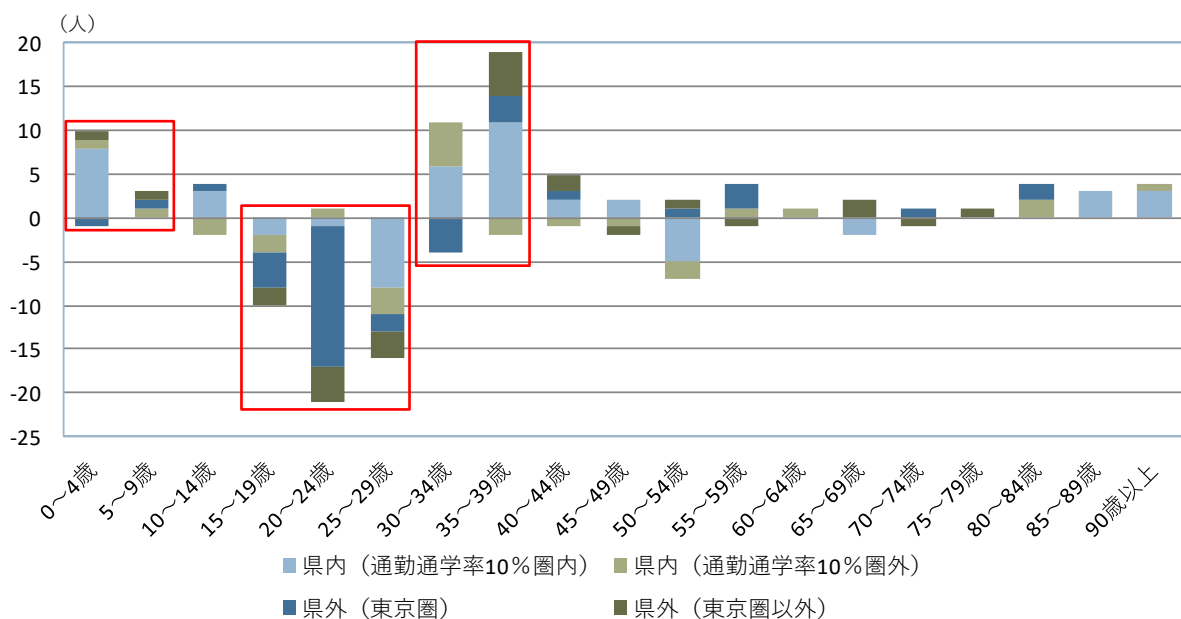


- ・純移動（転入数－転出数）については、男女ともに0～9歳はプラス（転入超過）となっています。
- ・また、男女ともに15～24歳はマイナス（転出超過）となり、25歳以降で町へ転入する傾向がみられますが、男性の方がその傾向は弱いです。
- ・2013年と比較すると、男女とも15～19歳の転出超過の傾向が強くなっています。（2013年→2018年：男性マイナス5→マイナス21人、女性マイナス3人→マイナス10人）

図表 18 5歳階級別純移動数の状況（男性，2018年）



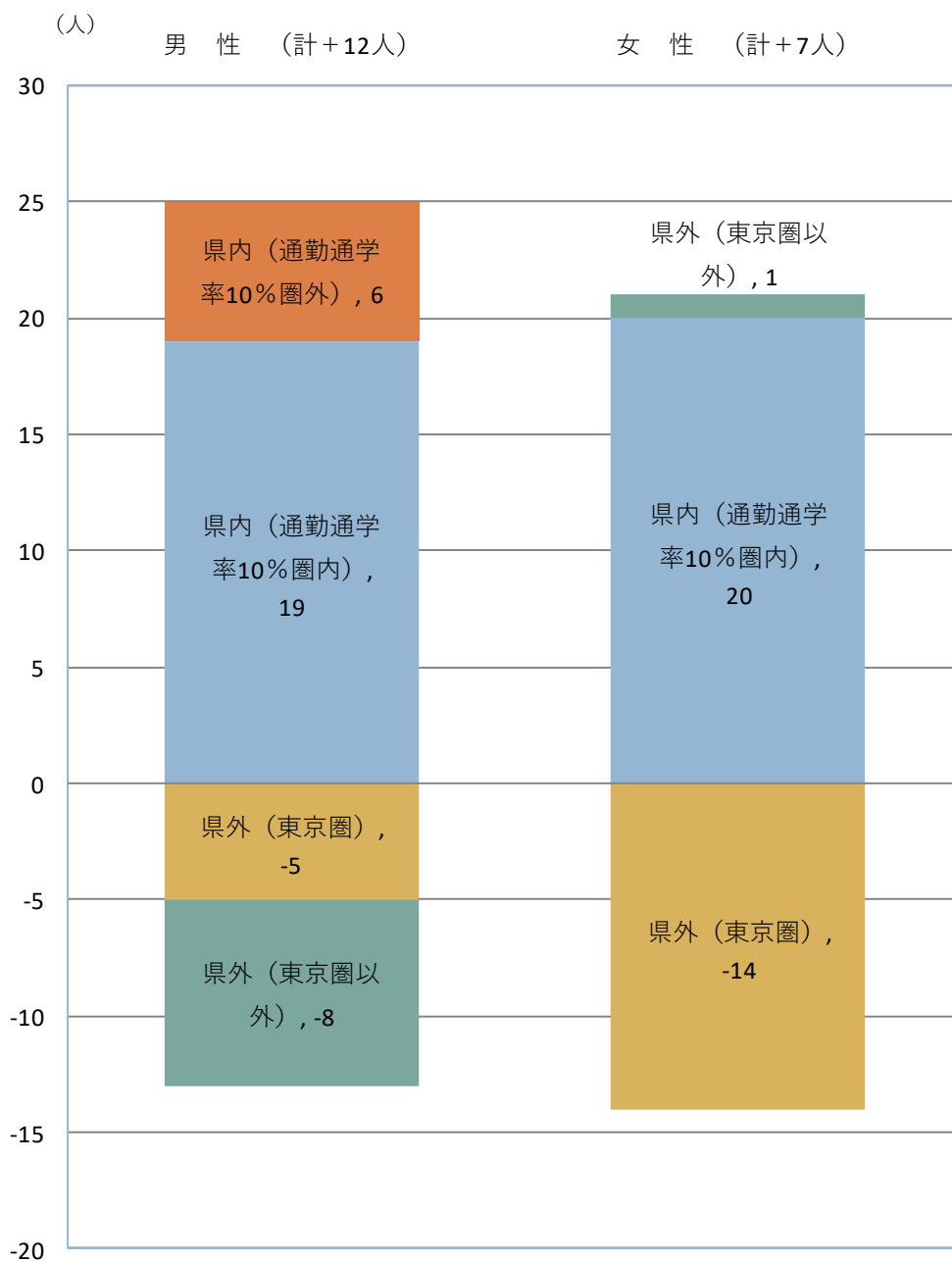
図表 19 5歳階級別純移動数の状況（女性，2018年）



(9) 地域別純移動の状況

- 2018年の地域別の純移動数（転入数－転出数）をみると、男女ともに転入超過で男性は12人、女性は7人です。
- 男性、女性ともに県内（通勤通学率10%圏内）の純移動が多いです。
- 女性の場合は県外（東京圏以外）の純移動はプラスですが、男性の県外の純移動はマイナスです。

図表 20 小布施町の純移動数（2018年）

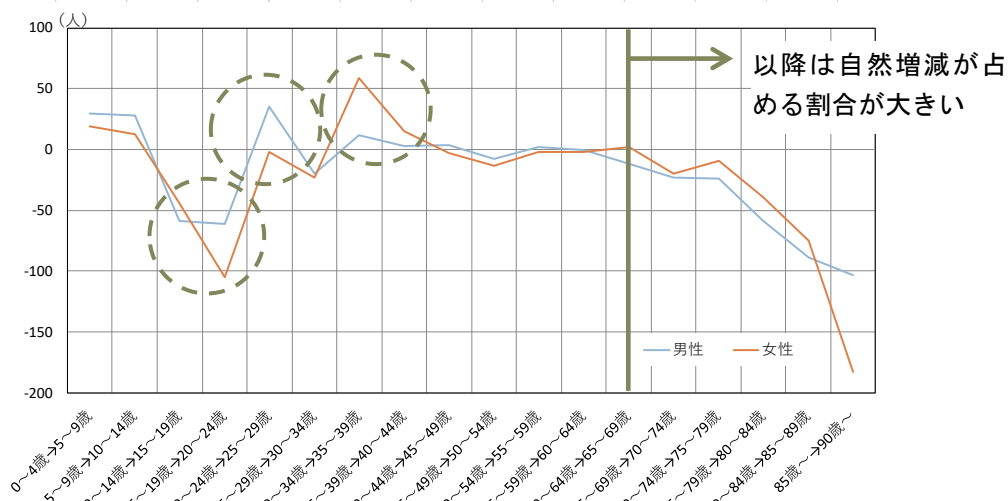


## 1-2. 年齢階級別の人口変化分析

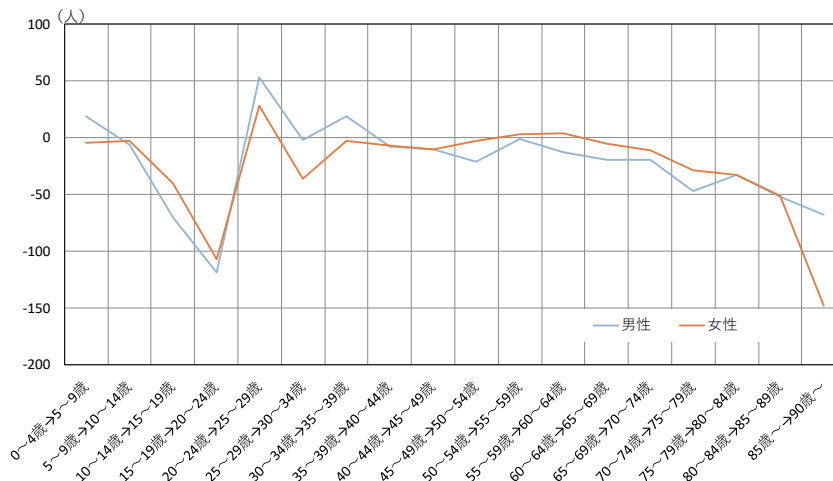
### (1) 性別・年齢階級別の人口変化の状況

- ・男性・女性ともに「10～14歳が15～19歳になるとき」及び「15～19歳が20～24歳になるとき」に大幅に人口が減少しています。これは、高等教育機関などへの進学や町外への就職に伴う転出が主な要因であると考えられます。
- ・一方、「20～24歳が25～29歳になるとき」に大きく人口が増加しています。これは、結婚、もしくは大学卒業後のUターン就職に伴う転入の影響が考えられます。
- ・なお、「60～64歳が65～69歳になるとき」以降も人口が減少しますが、これは自然増減によるものであると考えられます。
- ・2010→2015年と2005年→2010年を比較すると、2005年→2010年は、男女ともに「20～24歳が25～29歳になるとき」に最も人口が増加しますが、2010年→2015年では、男性は、「20～24歳が25～29歳になるとき」が最も多く、女性は、「30～34歳が35～39歳になるとき」が最も多くなっています。

図表 21 性別・年齢階級別人口変化（2010年→2015年）



図表 22 性別・年齢階級別人口変化（2005年→2010年）



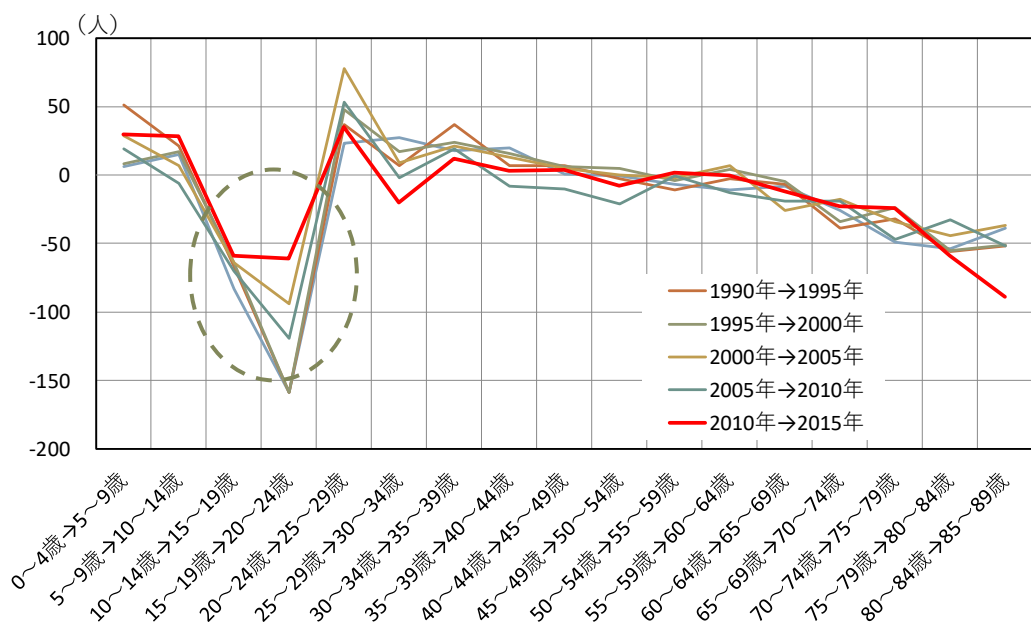
注) 国勢調査より2015年と2010年の5歳階級別人口の差を示す。

生残率の高い0～65歳においては、人口移動の状況と近いと考えられる。

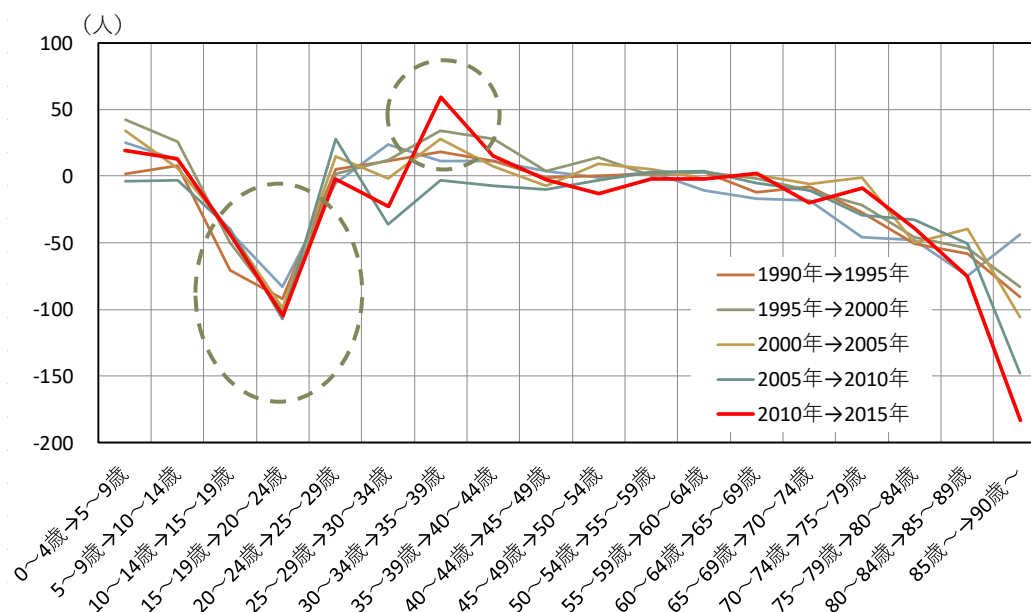
## (2) 性別・年齢階級別の人口変化の長期的動向

- ・男性・女性ともに、「10～14歳が15～19歳になるとき」及び「15～19歳が20～24歳になるとき」に大幅に人口が減少する特性及び、「20～24歳が25～29歳になるとき」に増加する特性は、長期的動向においても同様の傾向がみられます。しかし、2010年→2015年では、女性の「30～34歳が35～39歳になるとき」の増加が多くなっています。
- ・男性の「15～19歳が20～24歳になるとき」の減少幅は1995年から2000年をピークに縮小傾向にあり、2010年から2015年において、最小となりました。
- ・一方、女性の「15～19歳が20～24歳になるとき」の減少幅は、拡大傾向にあります。30～34歳が35～39歳になる時の増加が2015年に最大となりました。

図表 23 年齢階級別人口変化の長期的動向（男性，1980年→2015年）



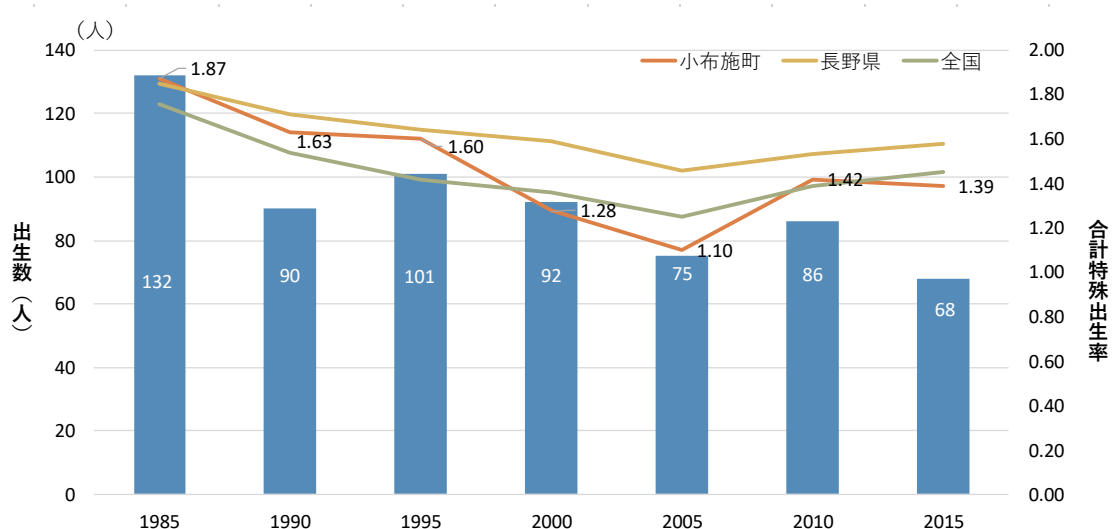
図表 24 年齢階級別人口変化の長期的動向（女性，1980年→2015年）



### 1-3. 出生に関する分析

- ・小布施町における出生数は1995年から減少傾向にありましたが、2010年は増加に転じましたが、2015年に減少しています。
- ・合計特殊出生率は全国及び長野県同様、2005年まで低下傾向にありましたが、2010年には上昇し、全国（1.39）を0.03上回りましたが、2015年には1.39となり、全国（1.45）を下回りました。

図表 25 合計特殊出生率の推移



注) 出生数は住民基本台帳、人口動態統計より作成

合計特殊出生率とは一人の女性が一生の間に産むであろう子どもの数を表し、15歳～49歳の女性の年齢ごとの出生率を合計した数字。厚生労働省「人口動態保健所・市町村別統計」より作成

図表 26 合計特殊出生率

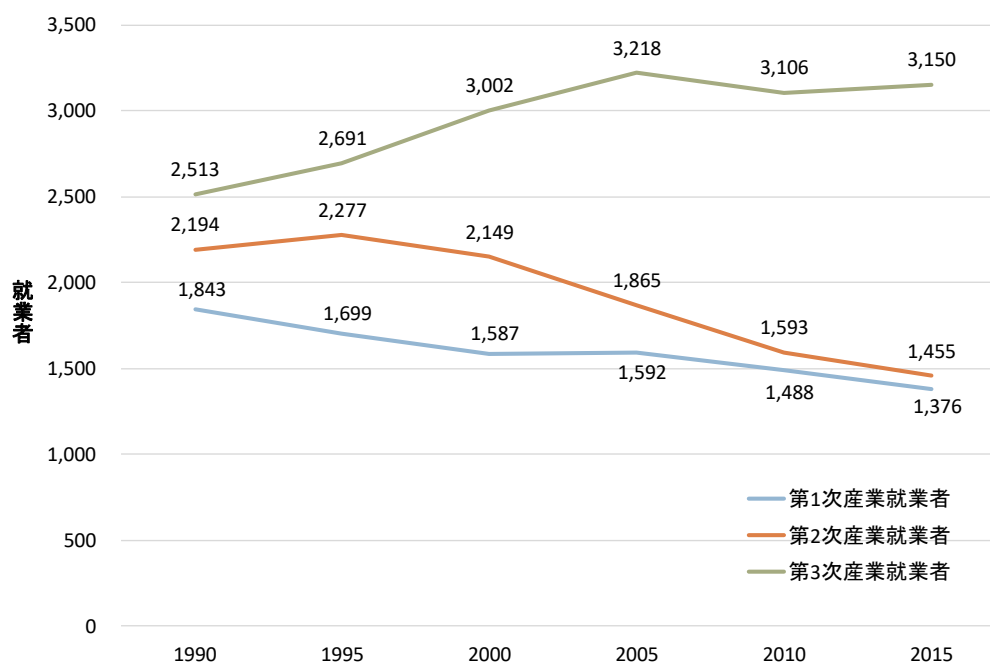
区分	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年
小布施町	1.87	1.63	1.60	1.28	1.10	1.42	1.39
長野県平均	1.85	1.71	1.64	1.59	1.46	1.53	1.58
全国平均	1.76	1.54	1.42	1.36	1.25	1.39	1.45

## 1-4. 雇用や就労等に関する分析

### (1) 産業別就業者の状況

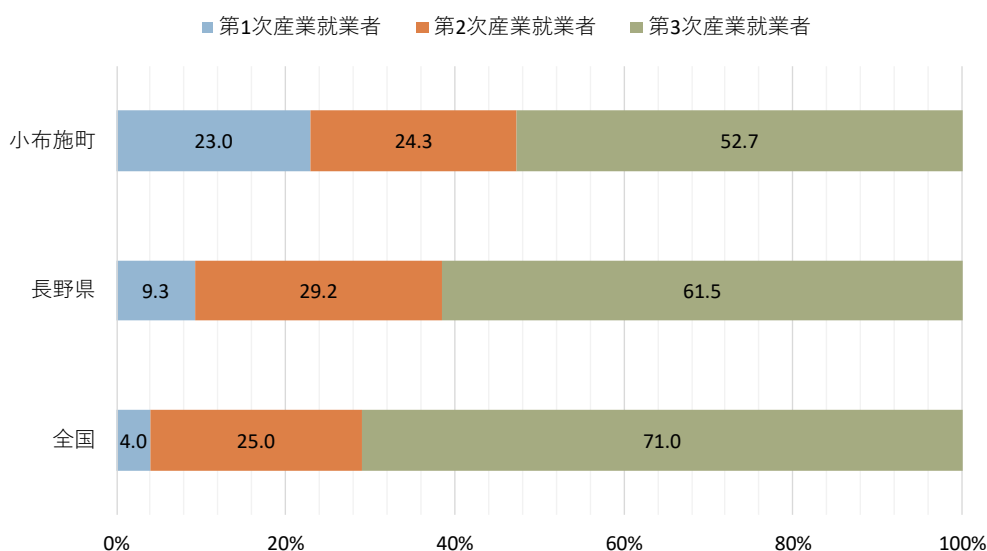
- ・第1次産業、第2次産業の就業者数はどちらも減少傾向にあります。第3次産業の就業者数は2005年以降に減少し、2010年以降に増加しています。
- ・就業者の構成比をみると、第1次産業の就業者割合が国や県よりも多くなっています。

図表 27 産業別就業者の推移



注) 国勢調査より作成

図表 28 産業別就業者構成比 (2015年)



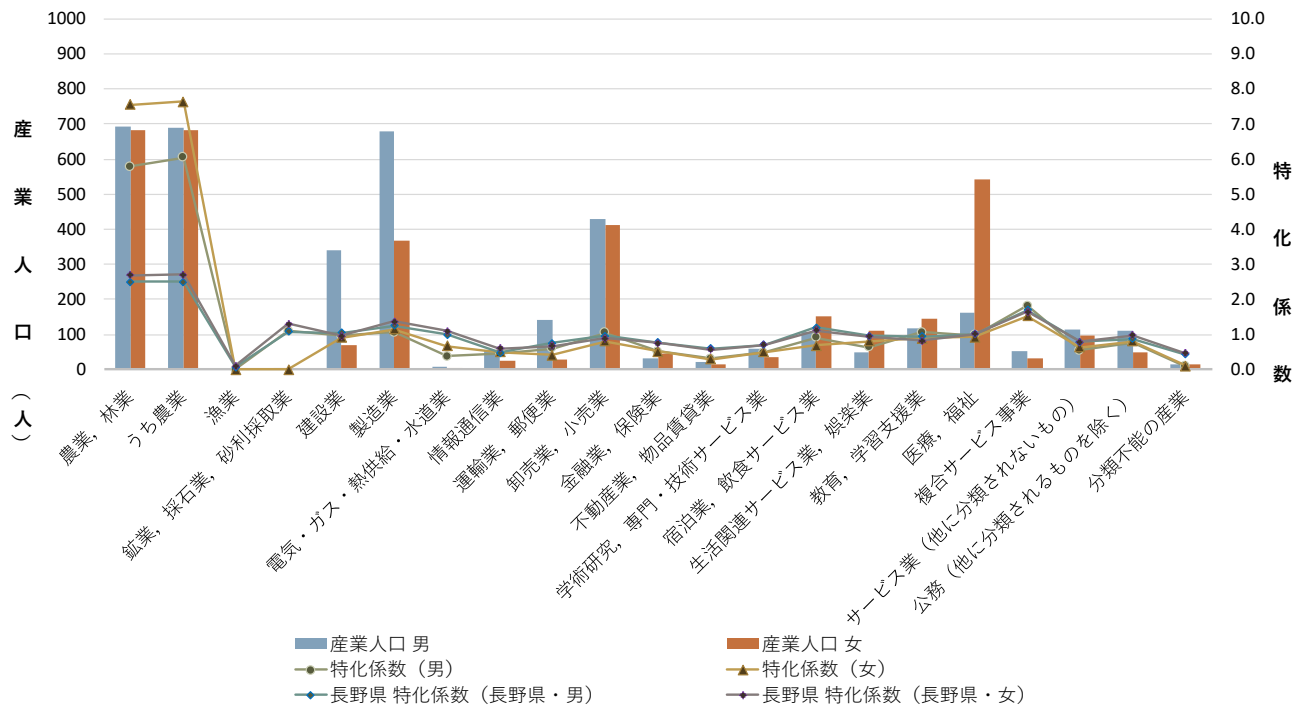
注) 国勢調査より作成



## (2) 男女別産業人口の状況

- ・男性は、農業、建設業、製造業、卸売・小売業の就業者が多いです。女性は、農業、製造業、卸売・小売業、医療・福祉の就業者が多いです。
- ・特化係数（産業別の小布施町の就業者比率／全国の就業者比率）をみると、農業が男女とも（男性 5.8、女性 7.6）非常に高く、次いで複合サービス事業（男性 1.8、女性 1.5）、製造業（男性 1.0、女性 1.0）が高いです。

図表 29 男女別産業人口（2015年）

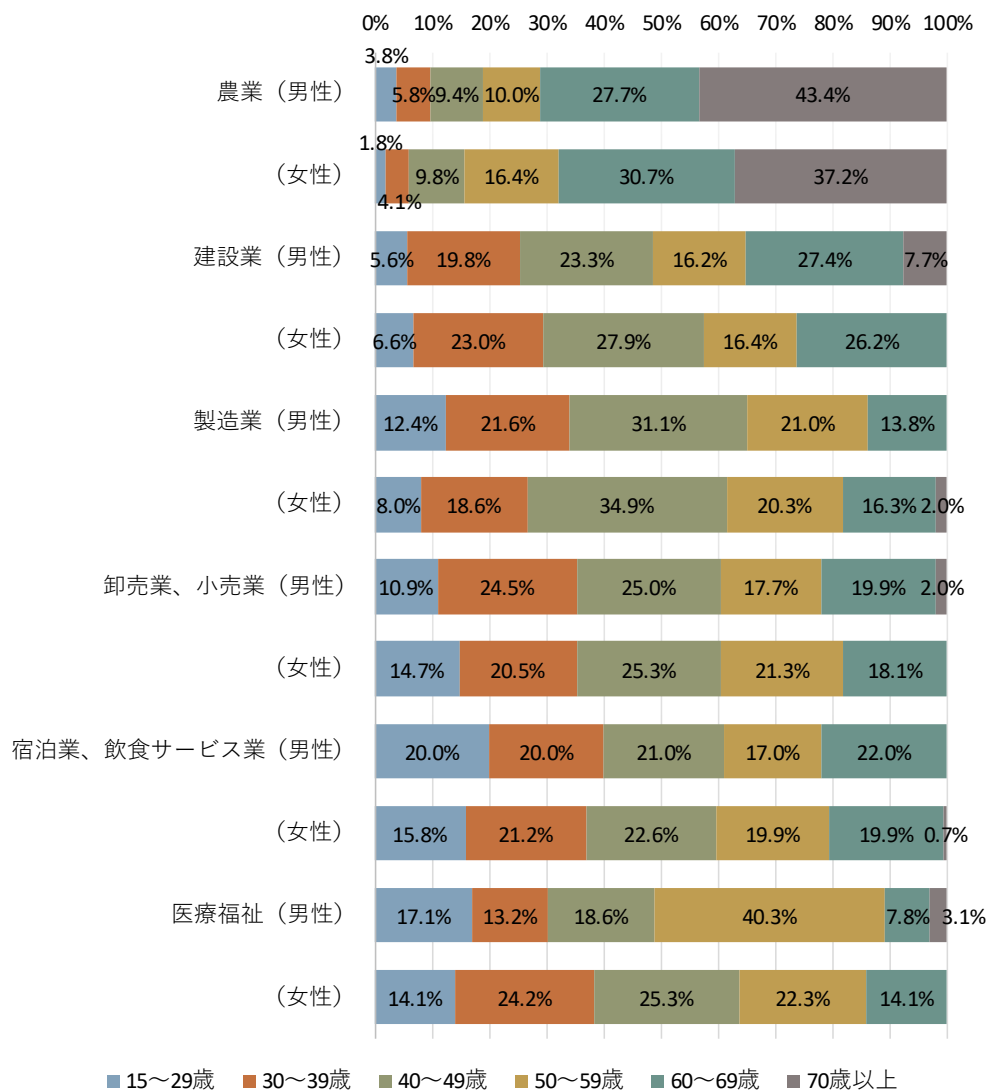


注) 国勢調査、従業地・通学地における人口・産業等集計より作成

### (3) 年齢階級別産業人口の状況

- ・男女ともに就業者数と特化係数が最も高い農業は、60歳以上が約7割を占めており、高齢化が進んでいます。今後、就業者が急激に減少する可能性があり、担い手の確保が課題です。
- ・製造業、卸売業・小売業、宿泊業・飲食サービス業、医療福祉は、比較的年齢構成のバランスがとれており、幅広い年齢層の雇用の受け皿となっています。
- ・建設業も比較的年齢のバランスが取れていますが、建設業の15～29歳の割合が低い点が懸念されます。

図表 30 年齢階級別産業人口の割合（2015年）



注) 従事者が多い産業及び特化係数の高い産業に関して作成

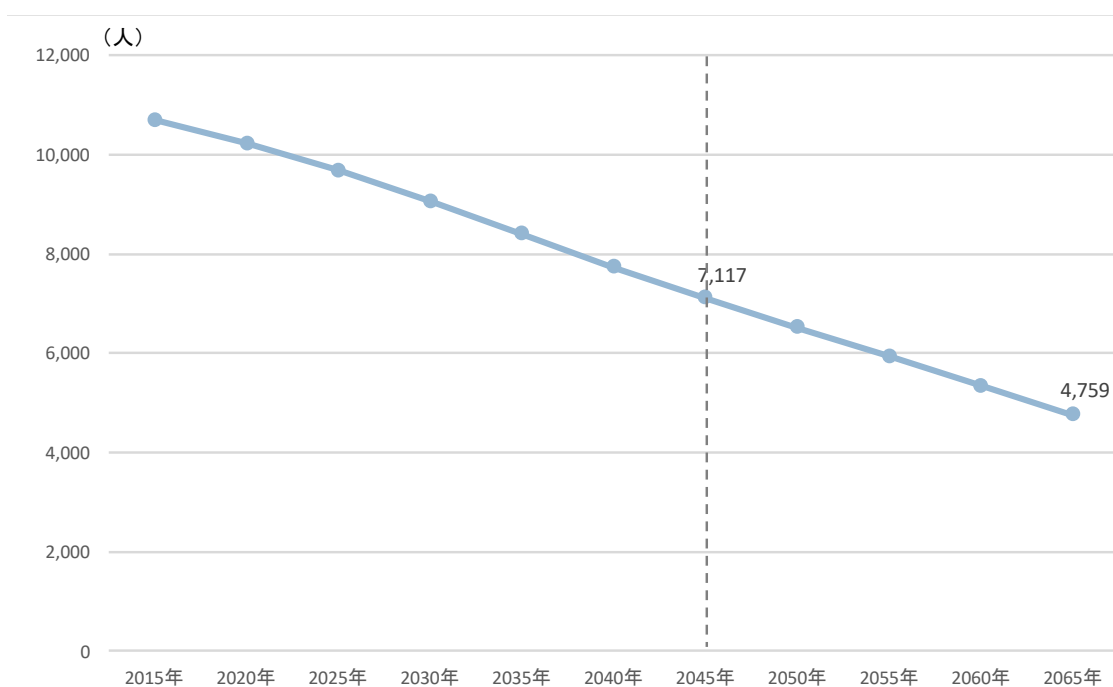
## 2. 将来人口推計

### 2-1. 将来人口推計

#### (1) パターン1（社人研推計準拠）の総人口

- ・パターン1による2045年の総人口は、7,117人です。

図表 31 総人口の比較（パターン1）

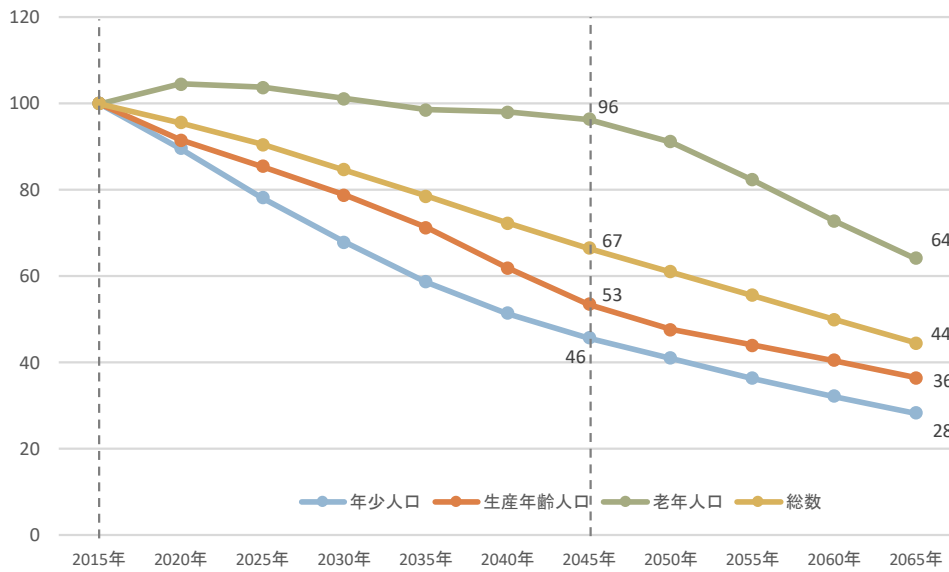


注) パターン1については、主に平成22年(2010)年から平成27年(2015)年の人口の動向を勘案し将来の人口を推計。移動率は、足元の傾向が続くと仮定。

(2) 人口減少段階の分析

- ・パターン1(社人研推計準拠)によると、2015年の人口を100とした場合の老年人口の指標は、2045年では96となり、人口減少段階は第2段階「老年人口の維持・微減(減少率0%以上10%未満)」と判定されます。

図表 32 人口の減少段階



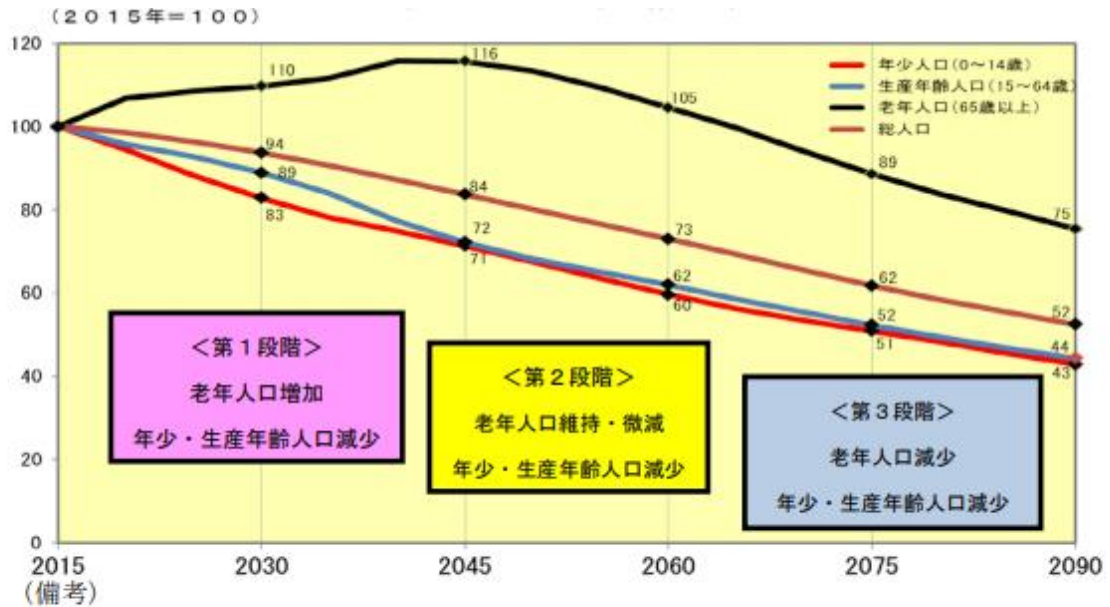
注) 社人研「日本の地域別将来推計人口」より作成。2015年の人口を100とし、各年の人口を指標化

図表 33 人口減少段階

	前計画				今回			
	2010年実績値	2040年推計人口	2010年を100とした場合の2040年の指数	減少段階	2015年実績値	2045年推計人口	2015年を100とした場合の2045年の指数	減少段階
老年人口	3,096	3,343	108	1	3,515	3,387	96	2
生産年齢人口	6,454	3,715	58		5,766	3,080	53	
年少人口	1,518	755	50		1,421	650	46	

「人口減少段階」は、一般的に、「第1段階：老年人口の増加(総人口の減少)」「第2段階：老年人口の維持・微減」「第3段階：老年人口の減少」の3つの段階を経て進行するとされている

【参考】人口の減少段階（全国）



1. 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」より作成。
2. 2015年の人口を100とし、各年の人口を指数化した。

「地方人口ビジョンの策定のための手引き」（令和元年6月版）より

【参考例】「人口減少段階」別・人口規模別の市町村数の状況の現象段階（北海道）

- ・北海道で1万人以上3万人未満の市町村は第3段階の市町村が68.6%、5千人以上1万人未満の市町村は第3段階の市町村が86.7%をしめています。

図表26 「人口減少段階」別・人口規模別の市町村数の状況（北海道）

	市町村の人口規模（2015年）											
	10万人以上		3万人以上 10万人未満		1万人以上 3万人未満		5千人以上 1万人未満		5千人未満		合計	
第1段階	15	83.3%	6	46.2%	7	20.0%	3	6.7%	5	6.5%	36	19.1%
第2段階	1	5.6%	3	23.1%	4	11.4%	3	6.7%	2	2.6%	13	6.9%
第3段階	2	11.1%	4	30.8%	24	68.6%	39	86.7%	70	90.9%	139	73.9%
合計	18	100.0%	13	100.0%	35	100.0%	45	100.0%	77	100.0%	188	100.0%

注）北海道は179市町村で構成されているが、札幌市は10行政区ごとに計算しており、合計は188となっている。

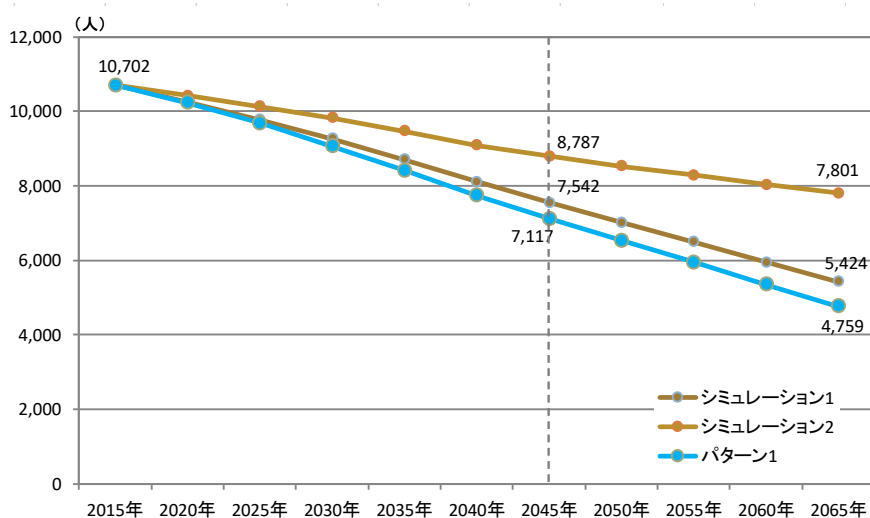
「地方人口ビジョンの策定のための手引き」（令和元年6月版）より

## 2-2. 将来人口に及ぼす自然増減・社会増減の影響度の分析

### (1) 自然増減・社会増減の影響度の分析

- ・シミュレーション1とシミュレーション2による2045年の総人口はそれぞれ7,542人（2015年比-29.8%）、8,787人（2015年比-17.9%）です。自然増減の影響度は3、社会増減の影響度は3です。前計画では、自然増減の影響度は2、社会増減の影響度は3でした。このため、人口対策としては、過去5年と同様、社会増をもたらす施策に取り組むと同時に、出生率上昇にむけた施策を行う必要があります。

図表 34 自然増減・社会増減の影響度の分析



注) シミュレーション1：仮に、合計特殊出生率が2030年までの間に人口置換水準（人口を長期的に一定に保てる水準の2.1）まで上昇したとした場合のシミュレーション

シミュレーション2：仮に、合計特殊出生率が2030年までの間に人口置換水準（2.1）まで上昇し、かつ人口移動が均衡したとした場合（転入・転出数が同数となり、移動がゼロとなった場合）のシミュレーション

図表 35 自然増減・社会増減の影響度

分類	計算方法	影響度
自然増減の影響度	シミュレーション1の2045年推計人口=7,542人 パターン1の2045年推計人口=7,117人 ⇒ 7,542人/7,117人=106.0%	3
社会増減の影響度	シミュレーション2の2045年推計人口=8,787人 シミュレーション1の2045年推計人口=7,542人 ⇒ 8,787人/7,542人=116.5%	3

「自然増減の影響度」：自然減が人口減少に与える影響度。「1」=100%未満、「2」=100~105%、「3」=105~110%、「4」=110~115%、「5」=115%以上の増加

「社会増減の影響度」：社会減が人口減少に与える影響度。「1」=100%未満注2)、「2」=100~110%、「3」=110~120%、「4」=120~130%、「5」=130%以上の増加

【参考】自然増減の影響度、社会増減の影響度について

- ・ パターン1（社人研推計準拠）とシミュレーション1とを比較することで、将来人口に及ぼす出生の影響度（自然増減の影響度）を分析することができる。
- ・ シミュレーション1は、人口移動に関する仮定をパターン1（社人研推計準拠）と同じとして、出生に関する仮定のみを変えているものであり、シミュレーション1による令和27（2045）年の総人口を、パターン1（社人研推計準拠）による令和27（2045）年の総人口で除して得られる数値は、仮に出生率が人口置換水準まで上昇したとした場合に30年後の人口がどの程度増加したものになるかを表しており、**その値が大きいほど、出生の影響度が大きい（現在の出生率が低い）ことを意味する。**
- ・ 次に、シミュレーション1とシミュレーション2とを比較することで、将来人口に及ぼす移動の影響度（社会増減の影響度）を分析することができる。
- ・ シミュレーション2は、出生の仮定をシミュレーション1と同じとして、人口移動に関する仮定のみを変えているものであり、シミュレーション2による令和27（2045）年の総人口をシミュレーション1による令和27（2045）年の総人口で除して得られる数値は、仮に人口移動が均衡（移動がない場合と同じ）となったとした場合に30年後の人口がどの程度増加（又は減少）したものとなるかを表しており、**その値が大きいほど、人口移動の影響度が大きい（現在の転出超過が大きい）ことを意味する。**
- ・ これにより、当該地方公共団体について、自然増減影響度が「3」、「4」、「5」と上がるにつれて、出生率を上昇させる施策に取り組むことが、人口減少度合いを抑える上でより効果的であるといえる。また、社会増減影響度が「3」、「4」、「5」と上がるにつれて、人口の社会増をもたらず施策に取り組むことが、人口減少度合いを抑える上でより効果的であるといえる。

「地方人口ビジョンの策定のための手引き」（令和元年6月版）より

(2) 人口の年齢構成の分析

- ・年齢3区分別のシミュレーション結果をみると、パターン1と比較して、シミュレーション1においては「0～14歳人口」の減少率が、-54.3%から-34.8%へ約20ポイント改善されます。一方、「15～64歳人口」、「65歳以上人口」の減少率は大きな変化はみられません。
- ・シミュレーション2では、「0～14歳人口」の減少率は-8.7%へ、約46ポイント改善されるとともに、人口全体の改善がみられます。特に子どもを産む年代である「20～39歳女性人口」の減少率が、-43.5%から-10.8%に大きく改善されます。

図表 36 推計結果ごとの年齢構成及び増減率

		総人口	0-14歳人口		15-64歳人口	65歳以上人口	20-39歳女性人口
			うち0-4歳人口				
2015年	現況値	10,702	1,421	384	5,766	3,515	922
2045年	パターン1	7,117	650	174	3,080	3,387	618
	シミュレーション1	7,542	927	260	3,227	3,387	436
	シミュレーション2	8,787	1,298	442	4,184	3,305	822

		総人口	0-14歳人口		15-64歳人口	65歳以上人口	20-39歳女性人口
			うち0-4歳人口				
2015年 → 2045年 増減率	パターン1	-33.5%	-54.3%	-54.7%	-46.6%	-3.6%	-33.0%
	シミュレーション1	-29.5%	-34.8%	-32.3%	-44.0%	-3.6%	-52.7%
	シミュレーション2	-17.9%	-8.7%	15.1%	-27.4%	-6.0%	-10.8%

参考 推計結果ごとの年齢構成及び増減率（前計画）

		総人口	0-14歳人口		15-64歳人口	65歳以上人口	20-39歳女性人口
			うち0-4歳人口				
2010年	現況値	11,072	1,518	443	6,454	3,096	1,094
2040年	パターン1	7,813	755	234	3,715	3,343	618
	シミュレーション1	8,185	1,088	343	3,754	3,343	607
	シミュレーション2	9,198	1,378	460	4,510	3,310	817
	パターン2	7,206	648	190	3,245	3,313	463

		総人口	0-14歳人口		15-64歳人口	65歳以上人口	20-39歳女性人口
			うち0-4歳人口				
2010年 → 2040年 増減率	パターン1	-29.4%	-50.3%	-47.2%	-42.4%	8.0%	-43.5%
	シミュレーション1	-26.1%	-28.3%	-22.6%	-41.8%	8.0%	-44.5%
	シミュレーション2	-16.9%	-9.2%	3.8%	-30.1%	6.9%	-25.3%
	パターン2	-34.9%	-57.3%	-57.1%	-49.7%	7.0%	-57.7%

注1) 2010年の総人口は年齢不詳を含むため、合計が一致しない部分がある

注2) 小数点以下の端数処理の関係上、合計が一致しない部分がある



### (3) 老年人口比率の変化

- ・パターン1では2050年まで老年人口比率が上昇し続けます。
- ・一方、2030年までの間、出生率が上昇するという仮定のシミュレーション1では、高齢化抑制の効果が2050年頃から現れはじめます。
- ・シミュレーション2は、2030年までの間出生率が上昇し、かつ、社会増減が均衡する仮定のもので、老年人口比率が2045年をピークに減少すると想定されています。したがって、高齢化抑制の効果はシミュレーション1よりも高くなります。

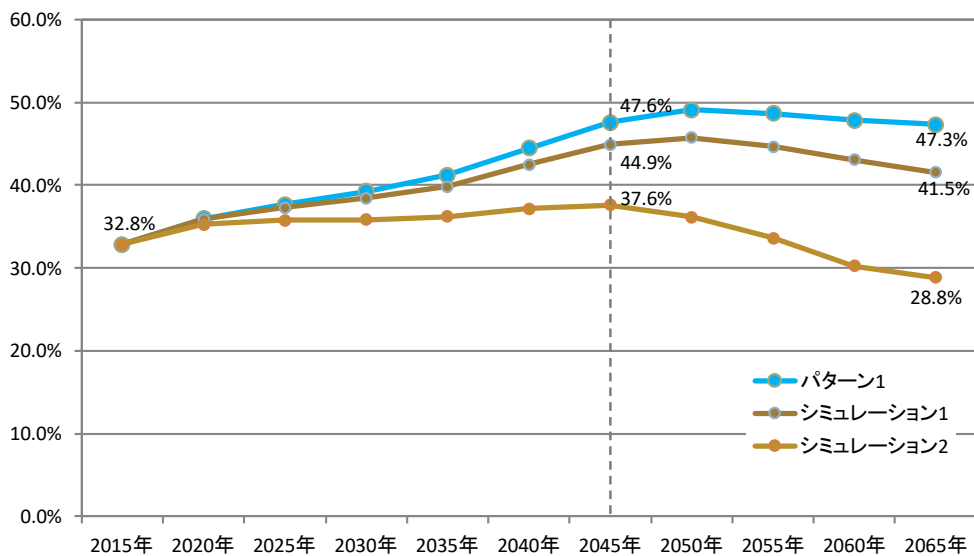
図表 37 総人口・年齢3区分別人口比率

		2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年	2055年	2060年	2065年
パターン1	総人口	10,702	10,227	9,680	9,063	8,407	7,743	7,117	6,529	5,947	5,351	4,759
	年少人口	13.3%	12.4%	11.5%	10.7%	9.9%	9.4%	9.1%	8.9%	8.7%	8.5%	8.4%
	生産年齢人口	53.9%	51.6%	50.9%	50.1%	48.9%	46.1%	43.3%	42.0%	42.6%	43.6%	44.2%
	老年人口	32.8%	35.9%	37.7%	39.2%	41.2%	44.5%	47.6%	49.1%	48.7%	47.9%	47.3%
シミュレーション1	総人口	10,702	10,249	9,773	9,259	8,697	8,109	7,542	7,009	6,486	5,951	5,424
	年少人口	13.3%	12.6%	12.3%	12.5%	12.7%	12.6%	12.3%	12.2%	12.2%	12.3%	12.6%
	生産年齢人口	53.9%	51.5%	50.4%	49.0%	47.5%	44.9%	42.8%	42.0%	43.1%	44.6%	45.9%
	老年人口	32.8%	35.9%	37.3%	38.4%	39.8%	42.5%	44.9%	45.7%	44.6%	43.0%	41.5%
シミュレーション2	総人口	10,702	10,419	10,127	9,816	9,466	9,089	8,787	8,527	8,281	8,032	7,801
	年少人口	13.3%	12.1%	11.7%	12.5%	13.4%	14.2%	14.8%	15.3%	15.6%	15.7%	15.9%
	生産年齢人口	53.9%	52.6%	52.5%	51.6%	50.4%	48.7%	47.6%	48.5%	50.8%	54.1%	55.2%
	老年人口	32.8%	35.2%	35.8%	35.8%	36.2%	37.1%	37.6%	36.2%	33.6%	30.2%	28.8%

注1) 2010年の総人口は年齢不詳を含むため、合計が一致しない部分がある

注2) 小数点以下の端数処理の関係上、合計が一致しない部分がある

図表 38 老年人口比率



## 2-3. 人口の変化が地域の将来に与える影響の分析

人口動向及び将来人口推計の整理から、小布施町においては人口減少、少子高齢化が進むことが予想されます。それぞれに対し、地域の将来に与える影響を分析します。

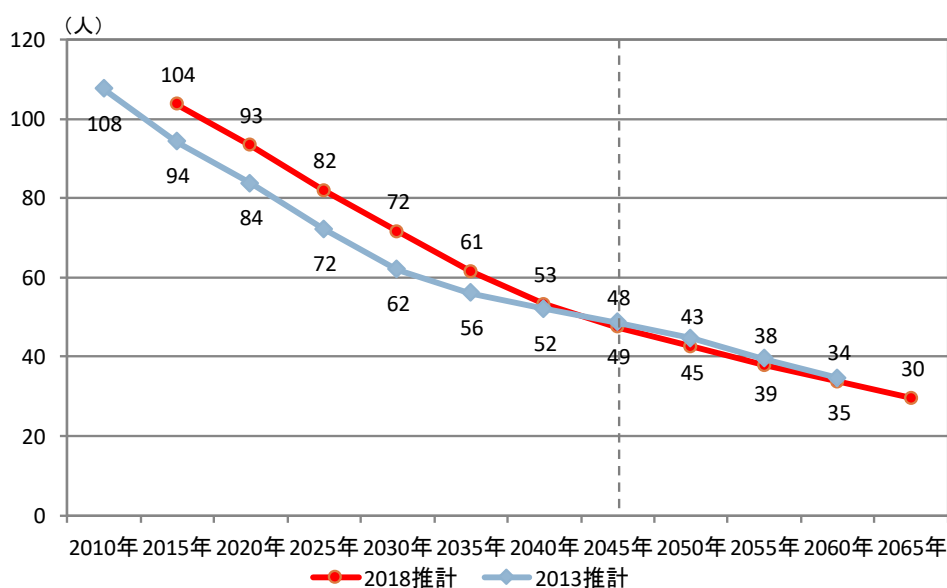
### (1) 人口減少による影響

- ・人口減少による影響は、同世代が少ないという問題、税収が減るという問題、子どもを産む女性が減るという問題等につながります。

#### ①同世代の人口（小中学校の1学年の人数）

- ・小中学校に通学する年代（5～14歳）の1学年あたりの人数の変化をみると、2015年で104人ですが、2045年には半数近い48人になります。

図表 39 小中学校の1学年の人数（小布施町全体）



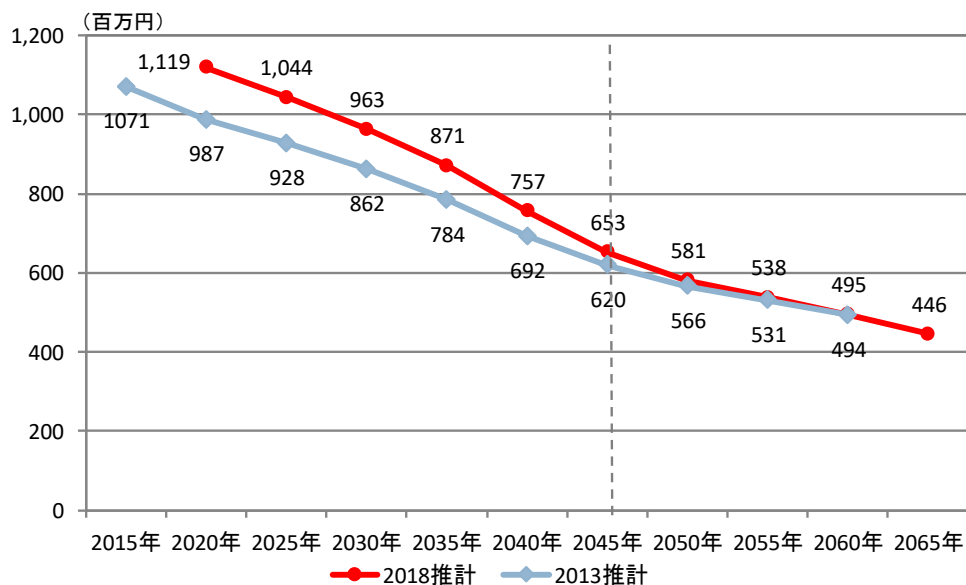
注) 社人研「日本の地域別将来推計人口」(パターン1)より作成

5～14歳の人口を1学年とするため10で除している。2018年推計の2015年は実績値

## ②税収の減少（町民税）

- ・町税は町民税、固定資産税、軽自動車税等から構成されます。一般的に町民税は人口の影響を受けやすいとされています。
- ・2019年度の予算より、生産年齢人口（15～64歳）一人あたりの町税額を算出し、それを基に町税の変化をみると、2019年の1,119百万円が2045年は620百万円と、ほぼ半減します。
- ・税収全体においては人口減少の影響を受けにくいものもありますが、政策的な投資を行うためにも財政効率化の必要性が高いと考えられます。

図表 40 町税の変化



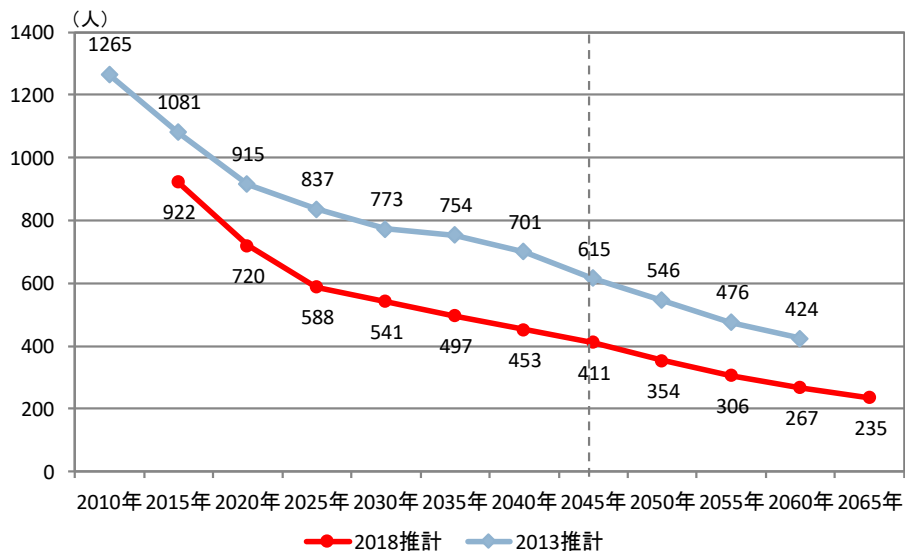
注) 社人研「日本の地域別将来推計人口」(パターン1)より作成

2013年推計は、2015年度の予算額より、町税1,070,516千円を、生産年齢人口5,743人(2015年推計値)で除すことにより生産年齢人口1人あたりの町税を186,404円とし、それに人口推計値を乗ずることにより算出。2018年推計は2019年度の予算額より、町税1,119,164千円を、生産年齢人口5,278人(2020年推計値)で除すことにより、生産年齢人口1人あたりの町税を212,062円とし、算出。

### ③子どもを産む年代の女性の人口（20～39歳）

- ・子どもを産む年代の女性の人口変化をみると、2015年の922人から2045年には411人に減少します。
- ・保育や子育て世代の女性が住みやすい環境をつくり、子どもを産む年代の女性の転出を抑え、転入を増やすことが有効であると考えられます。

図表 41 子どもを産む年代の女性の人口



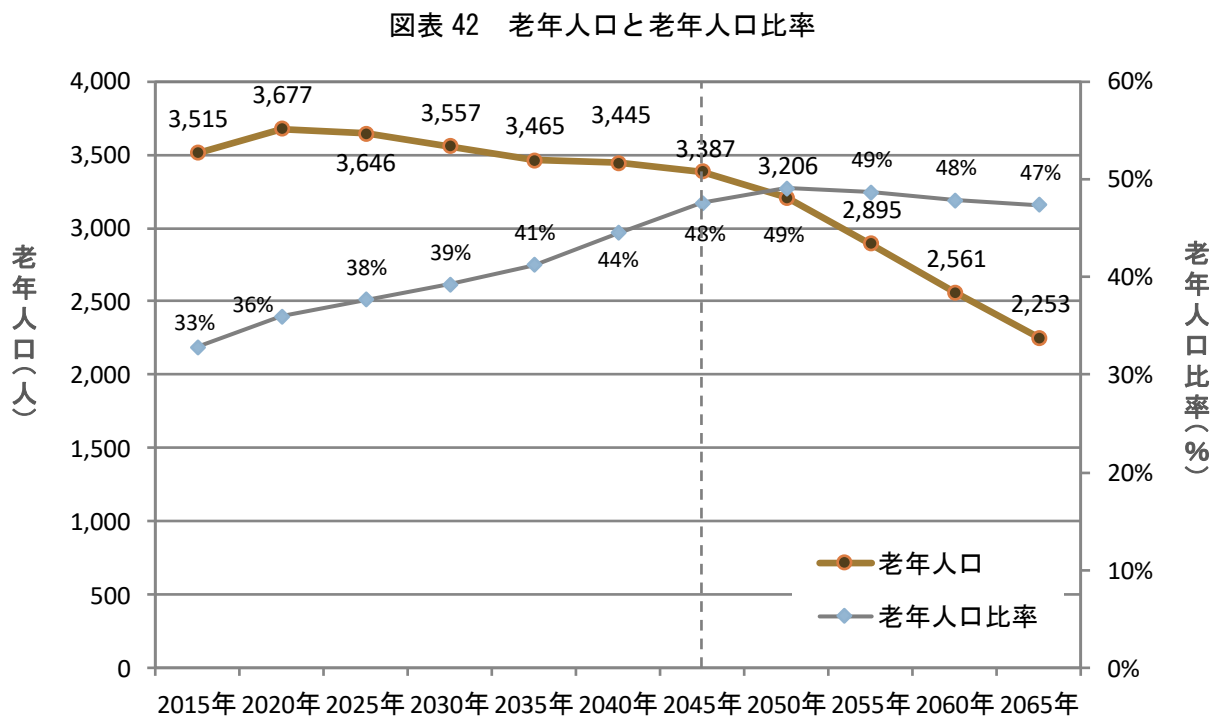
注) 社人研「日本の地域別将来推計人口」(パターン1)より作成  
子どもを生む年代の20～39歳の女性の人口

## (2) 高齢化の影響

- ・ 老年人口比率（65歳以上の人口比率）は高止まりが予想されていますが、老年人口の推移をみるにより高齢者向けのサービスの必要量が予測できます。
- ・ また、自立度が下がる80歳以上の人口推移を分析します。

### ① 老年人口と老年人口比率の変化

- ・ 老年人口比率（65歳以上人口の比率）をみると、2045年に48%となり、その後ほぼ横ばいで推移します。
- ・ 一方、老年人口（65歳以上人口）は、2020年をピークに減少局面に入り、2060年には2,253人（2015年比 - 28.0%）に減少します。
- ・ 高齢者向けのサービスの必要量は下がることから、施設等の統合を計画的に進めるとともに、地域連携による高齢者の活動機会の確保が求められます。



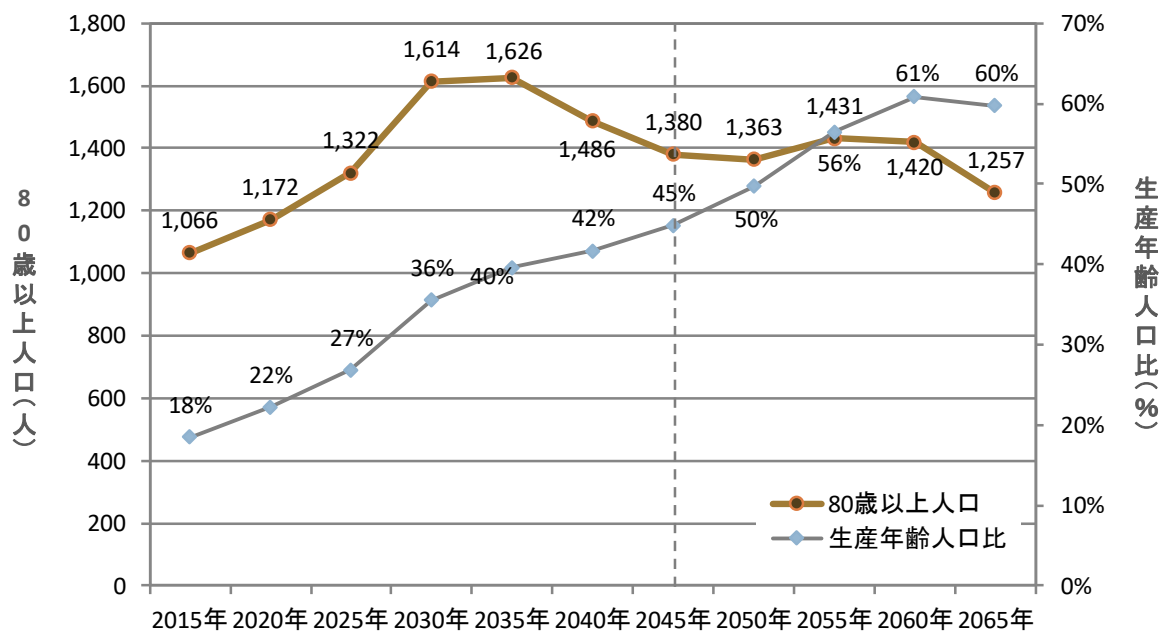
注) 社人研「日本の地域別将来推計人口」(パターン1)より作成

## ②80歳以上の人口と生産年齢人口比率の推移

- ・全国の高齢者を対象に20年間の追跡調査を行った結果<sup>注</sup>をみると、男性の約80%、女性の約90%は、70歳代まで高い自立度を維持することが分かっています。
- ・そこで介護が必要になる可能性が高い80歳以上の人口推移をみると、2030年までは上昇、その後5年間は横ばいで、2035年以降、急激に減少します。
- ・特別養護老人ホームや介護老人福祉施設等、介護を伴う施設に関しては2035年までは現状のサービス量を維持する必要があり、その後必要なサービス量は減少します。
- ・一方、介護の提供側である生産年齢人口（15～64歳）に対し、介護が必要になる可能性が高い80歳以上の人口の割合は、2060年まで上昇し続けて61%に達することから、家庭のみでの介護がますます難しくなることが予想されます。
- ・民間の介護サービス提供企業と連携する等、地域ぐるみで介護を行う体制やサポートづくりが求められます。

注) 秋山弘子(2010)『長寿時代の科学と社会の構想、科学』, 岩波書店

図表 43 80歳以上の人口と生産年齢人口比率の推移



注) 社人研「日本の地域別将来推計人口」(パターン1)より作成

## 3. 人口の将来展望

### 3-1. 人口の推計パターン

本町の人口に関する推計のパターンを以下のように推計しました。

#### 自然増減について

前計画では、結婚・出産・子育て環境の充実などにより、2030年までに人口置換水準<sup>\*</sup>の2.1を目指していました。しかし、小布施町の合計特殊出生率は、2010年に1.42でしたが、2015年に1.39となりました。今後、人口置換水準を目指すことは難しいことが予想されます。このため、合計特殊出生率が大幅に上昇しないことを想定し、合計特殊出生率1.39を維持した場合、2030年に2025年の合計特殊出生率1.42に戻った場合の推計を行います。

#### 社会増減について

前計画では、若者に魅力的なまちづくり、結婚・出産・子育て環境の充実、住居の確保、若い世代の就労を支援する雇用の受け皿づくりなどにより、子育て世代や進学・就職で転出した若い世代の転出抑制と転入を促進し、毎年10世帯（36人程度）の転入を目指していました。

前計画時に転入を想定した世帯（親30～39歳×2人、子ども0～9歳×2人）の社会増減実績は、2005年、2010年、2015年で比較すると、2005年から2010年は、親の世代と考えられる30～39歳の転入が1人、子どもが6人だったことが想定されます。また、2010年から2015年は、親が89人、子どもが90人、合計179人（4人家族とした場合、5年で44.8世帯、年間約9世帯）が社会増したことが想定されます。このことから、今後も前計画と同様に10世帯の転入による社会増加をめざすこととし、推計を行います。

※2010年から2015年の30～39歳の転入は、男性が15人、女性が74人となっています。

図表 44 2005年→2010年、2010年→2015年の社会増減

	2005→2010年			2010→2015年		
	男	女	合計	男	女	合計
0～4歳→5～9歳	19	-4	15	30	19	49
5～9歳→10～14歳	-6	-3	-9	28	13	41
30～34歳→35～39歳	19	-3	16	12	59	71
35～39歳→40～45歳	-8	-7	-15	3	15	18
合計	24	-17	7	73	106	179

※国勢調査結果

※人口置換水準とは、人口を長期的に一定に保てる水準

合計特殊出生率の維持・微増、社会増をめざすことにより、小中学生の1学年の人数を80人、85人、90人、95人、100人とした場合の人口推計を以下に示します。

図表 45 人口推計のパターン

	2045年		2065年		人口維持のために必要な 転入世帯・人数	
	1学年の 人数	人口	1学年の 人数	人口	年間 転入世帯数	人数
出生率維持 2015年実績1.39	100	10,476	105	10,642	17	69
	95	10,216	98	10,175	15	62
	90	9,927	91	9,655	13	54
	85	9,667	84	9,188	12	46
	80	9,378	77	8,669	10	38
出生率微増 2010年実績1.42	100	10,431	105	10,575	17	66
	95	10,170	98	10,105	15	59
	90	9,880	91	9,582	13	51
	85	9,619	84	9,112	11	44
	80	9,329	76	8,590	9	36

※自然増減は過去5年の推移を踏まえた推計

※転入の想定的人数は世帯数に4人を乗じた数

図表 46 人口の推計パターン

